



西京学院の攻防

ハルカ・ヘルカ

鳥居大誠

A young woman with brown hair tied in a bun with a small white bow, wearing a light blue hoodie. She is standing in a misty, blue-toned forest. The background is a dense, misty forest with a blue and green color palette. The overall mood is serene and slightly mysterious.

ハルカ・ヘルカ1

鳥居大誠

目次

第一話	二の疼痛	4
第二話	一の恐怖	19
第三話	四の仲裁	32
第四話	一の行動	55
第五話	二の逃走	82
第六話	一の希望	102
第七話	五の記憶	131
第八話	六の叫喚	149
第九話	私の一步	177
第十話	私の選択	195
生きる意味を探すための、あとがき		203

※この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは一切関係ありません。

第一話 二の疼痛

私、ますだ はるか榊田遥香の踏み込んだ一步は死への第一歩だった。

落ちるといふ内臓の浮遊感に多少の恐怖を感じたものの、死ぬことに対しての心のブレーキは全く作動していなかった。けれど、グググと地面に引っ張られている僅か数秒の時間だけは、お父さんの顔が頭に浮かんでしまつて、目が少しだけ熱くなった。クリープ現象のようにすうっと足を空に踏み出して、アパートの三階、自室のベランダから飛び降りた。今日、朝日が昇る前に死亡した。

私が飛び降りる十数時間前まで遡つて話をしよう。つまり前夕の話である。家では暖房が唸り続ける音が聞こえる。でもその静かな騒音は生活の中におさまつていて、暖房の振動こそが日常の唯一のBGMであつた。遮光カーテンの隙間からは夕方の日差しが少しばかり漏れていて、この部屋には数か月分の私のため息が広く充滿していた。手元にあつたりモコンで意味もなくテレビをつけてもこの時間ではどのチャンネルでも報道番組しか流れていなかった。その内容も私にとっては酷く興味の無いもので、今は「の が み や す あ き野上泰明総理がせ い き よ う西京学院大

学医学部の對馬教授^{つしま}をはじめとする日本學術總會の会員候補を任命拒否したこと」について報じられている。皆いろいろな組織的圧力を背負って生きているのだろうが、双方に聞く耳を持たないコメンテーター同士の討論番組は見ているだけで疲弊しまう。適当にザッピングをし、コマーシャルが三度ほど続いたタイミングでリモコンを軽く投げ捨てた。そしてまた硬い床に寝っ転がった。右足に痒みを感じて脛に手を当てると、そこには一カ月前に作った小さな瘡蓋があつて、私は暇つぶしがてらそれを削って心地のよい血液を流した。血は床に向かつて一直線に流れ、敷いてあつた青い毛布にぶつかつて吸収された。大きな部屋に懂れたのは大学一年生の春までのことで、四年生になつた私にとってこの部屋はやや大きく、四十三インチのテレビにさえも圧迫感と虚しさを感じる。テレビの前にはお父さんと二人で撮つた幼いころの写真が立てかけてあつて、今日もそれを見ながら暖房が直撃する定位置で毛布をかぶって睡眠をとつた。少し経つて通販番組の女性司会者の張りのある声で目を覚ますと、乾いてしまつたコンタクトレンズをかすかすと擦つて視界を確保し、凝つた体をグキッと回して意味もなく俯いた。大学も辞め、レンタカー屋でのバイトも辞め、明日も明後日も予定はない。ただ、「明日も生きている」というほぼ百パーセントにちかい保証だけが付きまとい、全く有限と思えない命に鬱を覚え退屈している。

「何で生きてるんだろう」

お腹がすいたわけでもないけれど、とりあえず何か味の濃いものを舌で感じたいと思ったので、段ボールの中の数少ないカップラーメンを一つ手にしてお湯を注いだ。完成を待つ三分の間にはスズを開き、友達の投稿を適当に消費してから画面を閉じた。直後無意識のうちに同じ画面を再度開きなおしては、適当にいいねボタンを押しまくって暇を潰していたのだ。ある友達は河崎重工の就職内定が決まって彼女とお祝い旅行をしていた。

ある友達は医学部の院試に受かり論文を書いていた。またある友達は情報ビジネスを始め、ある友達は美容師免許の取得のために猛勉強をしていた。みんなそれが自分のやりたい事だというのだ。けれど、その感覚が私には分からなかった。夢や目標にたどり着くことは一時的なことで、どうせ死ぬのなら、もう何も頑張らなくていいじゃん、と冷たい感想しか持てなかった。エリート企業に就職しようと、大学院に行こうと、国家資格を取ろうと、死ねば何もかもが無くなるんだ。頑張る方が馬鹿らしい。この時間に食べるカップラーメンは美味しい。食べて寝て遊んで死ぬ、これは人の生きる目的ではないが、何もない今の私にとっては寝て起きて食べる夜のカップラーメンこそが生きる意味なのかもしれない。スープを飲み干してまた横になるも眠気など一切訪れる様子がなく、考え事を探し始めると眉毛の上部に不快な熱を感じた。何となく寝ていることにもじれったさを感じるようになって、この歯がゆさを発散するために私はおもむろにウィンドブレーカーを手にした。朝から着ている青いジーンズと、しわの寄った白い長袖 टीシャツ の上から青白黒と三食に色分けさ

れたウィンドブレーカーを羽織って、鍵も閉めずに家を出た。近所一体は住宅街としてアパートや戸建ての家が連なっていて、屋外灯すらもほとんどないこの道は痴漢やストーカー事件の温床となっている。ポケットに両手をつっ込んで暫く歩いていると見えてくるのは近所でも有名な一軒家、通称デコ屋敷。青やら橙色の電飾で家全体を覆うようにデコレーションしていて、その一軒だけが異様なクリスマススムードを漂わせている。私も小さい頃はこういうキラキラとした家が好きだったけれど、今では同じそれを見ても哀れな心に浸ってしまっただけで、刺さる冷気に顔を強張らせながらも夜の街に足を向けた。深夜営業を実施しているアミューズメント施設の店内は昼間より強い照明で、少ない客と密集したクレイニングゲーム機を光が余るほどに照らしている。私はその中でデッドハウスと呼ばれるガンシューティングゲームの元へ行き、暫くリアルな人殺しを体験しようと思ってしまった。激しく揺れるバイクに乗りながら片手で銃を打って、襲ってくるゾンビを射撃するというものだったが、そのつまらなさに声も出なかった。狙撃を再現した振動とともに、スクリーン上に次々と出てくるゾンビのヒットポイントは0になるものの、それ以上でもそれ以下でもないことに気づいてしまっ、虚しさだけが自分の中に残ってしまった。早々に飽きが来た私は銃を置いて隣のパチンココーナーに入ってみるも、その騒音と煙草の煙を吸い、店内を半周だけして店を出た。自動ドアが閉まるときに一瞬、扉付近のスポット台に座っていた口髭をはやした中年男性に軽く睨まれた。

「お父さんとは、大違いだな」

私は世界のどこに必要とされているのだろうか。感覚だけで言えば夏バテに近い感覚だろうか。外に出て自動販売機を前にした私は、人生で初めて煙草を買うことにした。何となく、その気持ちよさを知ってみたかったのだ。銘柄の知識は全くなく、中段の右側に並んでいた一番安いケースを一箱買ったのだが、開封してビツリと並んだ白い煙草を見て、私は失望した。

「ライターは入ってないのね。吸えないじゃん」

煙草を試すに試せなくなつて、ビニールの封を剥がすだけ剥がしたケースを仕方なくウィンドブレーカーの左ポケットにしまい込んだ。特にすることもなくなつて、寒さに耐えるくらいなら家で暇と言っている方がましであることに気づき、私は家に帰った。

「慣れないことするんじゃないかった。もう、いいか」

帰り道の途中に書いた遺書メールを一人の親友に送信して私は、スマホを右ポケットにしまった。メールの送信ボタンを押した瞬間、この世界に終わりを告げてもいいのではないかと決心できたのだ。靴をやや引きずりながら共用廊下を歩き、家の戸を開けると私は、その安いスニーカーを脱がずに部屋へと上がっていった。

「変な感じ」

玄関からトイレ、お風呂、キッチンを順に通過し、はめていた腕時計をリビングの小物入れに丁寧に置いた。そして自分が過ごした部屋を置き去りにするようにベランダまで一直線に向かい、そのまま柵に登ってフワッと身を投げた。柵田遥香は死んだ。はずだった。ふと目を開けると私は例の定位置である暖房の真下、床の上で仰向けになつて寝転がっていた。

「夢か？」

夢は記憶を整理する過程において脳の中で断片的に再生される映像であるという。アパートの三階から頻繁に路上を見ていた私にとっては、整理できる記憶も僅かだったのかもしれない。しかし不思議なことにベランダから飛び下りた時の怖さや強烈な痛みは何となく覚えていたのだ。私は以前から自殺について調べていた。飛び降り自殺は意識を失うため痛みがないという話を聞いていたのだが、そんなものは全くの嘘だった。むしろ意識ははっきりとしていた。地面に身体のだの部位をどの順で強打したかが鮮明に分かるくらい、特に着地した瞬間の記憶ははっきりとしていた。その夢の記憶を思い出すだけで鳥肌が立った。けれど今は身体の痛みなんてものは全くない。体を起こすと自分の上半身が視界に入り、三色のウインドブレーカーが見える。

「ウインブレを着て……寝た？」

もしやと思ってポケットに左手を突っ込むと、そこには昨日の夢の中で買った煙草の感触があった。念のため

取り出してみると封が中途半端にあいていて、中には未使用の煙草がびっしりと並んでいる。

「？」

どこまでの記憶が夢なのだろう。ふとその夢の続きを思い出してスマホのメールの送信履歴を確認すると、そこには私の情けない一言の遺書が履歴として残っていた。

「自殺未遂？ 誰かが助けた……とか？」

スマホの時計は朝四時を指している。こんな時間に誰が助けてくれるだろうか。そう思っていた時、玄関付近で何者かが家に入ってくる物音がした。六割の恐怖と四割の好奇心でゆっくりと立ち上がって玄関まで向かうと、そこには靴を脱いでいる女性がいた。最初は私を助けてくれた人だろうと考え心が温かくなったのだが、その服装や背丈をみて、一気に心臓に鳥肌が立った。どうみても、私なのだ。全身の毛が逆立ちして、こめかみにぞわぞわとした嫌な感覚が走った。絶対に音を立てないように数歩後ろに下がって、冷えた心臓に手をかざした。髪型も服装も靴も全て私。そいつはまだ私のことに気づいていなくて、靴を脱ぎ切つてようやく顔を上げた。顔も、私だった。

「……」

その心霊現象に声も出ず、ただ入ってきた外気が相乗して余計に私を震わせた。

「……」

目を合わせた彼女もまた、まるで熊に出会った人間のように固まりながら怯えていて、その顔を見た私も同じように固まってしまった。顔を見た瞬間、今までに体験したことのない種類の恐怖に襲われて、お互いに半歩分後ずさりをした。沈黙は時間の経過とともにどんどん重くなっていく。上から下まで一寸変わらず私と同じ彼女だが、彼女の方がどこか劣って見える。半透明なわけでもないし、ロボットのようない動きをするわけでもないけれど、私の劣化品のような、下位互換のような、そんな感じがする。このまま黙っていても何も始まりはしないだろう。この不気味な状況をなんとか理解するために、恐る恐る私から話しかけた。

「こ、んにちは」

「……こんにちは」

不思議なことに声だけは、私の声じゃないように聞こえる。

「あな、たは？」

「榊田です」

夢であってほしい。幻想であってほしい。彼女が喋った。彼女は玄関口から一步も動くことなく、恐る恐る私に名前を尋ねてきた。

「……柊田です」

私もそう答えるしかなかった。私は柊田以外の何者でもないのだから。

「亡霊、ですか？」

それはこちらのセリフである。予想外の質問だったが、自殺を経験した身としては自分が亡霊でないと断言できず、つい自分の身体を触って確かめてしまった。しかし確実に肉体はある。

「いえ、多分違うと思います」

「私を殺しに来たんですか？」

そんなつもりはさらさらなかった。しかし返答に悩んで沈黙を続けてしまった結果、彼女は少し震えた声で言葉続けた。

「ここは私の家です。出てもらえますか」

いずれそういう展開になるとは思っていたが、残念なことに私もこの家以外に住処はない。この世界一不明な女の闘いで負けてはいけないと思った私も、腕をまくって同じように言葉を返した。

「いえ、ここは私の家です」

「証明、できるんです？」

そう言われて私はありったけの情報を並べた。

「ええ。梶田遥香二十二歳、父は死に、家族は母と二個上の姉の三人。あなたこそ、自分の証明できます？」

「梶田遥香二十二歳、父は」

「それは後出しです。何か新規の情報で」

彼女は少し考えた後にぺらぺらと家の情報を話し出した。

「印鑑はベッドの横の棚の引き出しの上から二段目。へそくりは洗濯機の中三万円。あなたこそ、自分の家については何も触れていないのではなくて？」

「そうですね。ドライヤーは食器棚に置いている、とか」

「それはここからでも見えます。お手紙セットは？」

「未使用のものが棚の最下段にびっしり」

「裁縫セットは？」

「その二段上の棚の右端」

「まな板と包丁は？」

「まな板はキッチンの上の戸棚の一番右、包丁は足元の棚の挿し込む所」

「昔のスマホは？」

そう聞かれて私は左腕を痒くもないのに搔くことになった。何個かしまつてありそうな場所は浮かぶのだが、自信を持って言えるほど記憶が正確ではなかったのだ。しかし、忘れたと言うこともできず、私は言葉に詰まってしまった。

「あ、えっと……」

すると彼女はどさっと音を立てて廊下に両膝をつき、肩から崩れ落ち小声で呟いた。

「なんで……。私が飛び降りたから？」

そんな弱い彼女の声を聞いて私は一つヒントを得られた。今までの常識からすればかなり非科学的な内容だが、私が二人存在する可能性はこれくらいしか思いつかなかった。それを確認するために私はワタシに対して意地悪な揺さぶりを仕掛けた。

「とにかく、私が榊田遥香です」

「いや、私が榊田遥香です」

「このベランダから飛び降りて死のうとしたのに？」

そう言っただけのポケットから取り出したスマホからメールの送信履歴の画面を見せた時、彼女は何も言えな

くなってしまった。私は彼女のその反応を見てすかさず追い打ちをかけた。

「あなたは柘田遥香かもしれない。けどあなたは自分の人生を捨てようとした。昨日ゲーセンから帰ってあなたはベランダから飛び降りた。柘田遥香を捨てた女がよくも柘田遥香を名乗れるな。この死に損ないの偽物が」

それを聞いた彼女が何を考えていたかは私には一切分からない。この沈黙の回収の仕方を知っていたのは目の前の彼女だけで、その一瞬は私にとって突然訪れた。彼女は勢いよく立ち上がり、私に近づいてくる途中、キツチンの足元の棚から一番大きな包丁を一本抜き出して……。

痛いとか激痛とか、そんなことを考えていらなかった。思いつきもしなかったのかもしれない。一瞬のことですぎて痛くなかったのだろう。だんだんジグウーと腹部が熱くなって、この一瞬は生きたいとか死にたいとかも考えていなかった。でも私の身体はなんとか痛みを分散させようと無意識に目を剥いていて、後からジワジワくる痛みを硬直しながら耐えるしかなかった。この痛みはきつと、あの世に行っても忘れないだろう。私が死んだら明日の新聞にはなんて載るのだろう。自殺かな。それとも他殺かな。そのまま私はゆっくりと、目を閉じた。

二の疼痛

二の遥香

- ・ 桧田遥香
- ・ 22 歳
- ・ 女性
- ・ 一人暮らし

飛び下り自殺を試みるも、未遂に終わる……という夢を見たのだろうか。

いつもの場所で目を覚ますと突然、自分と同じ容姿のクリーチャーが家に現れ、意に染まない。



一の遥香

- ・ 桧田遥香
- ・ 22 歳
- ・ 女性
- ・ 一人暮らし

飛び下り自殺を試みるも、未遂に終わる。

転落後、仕方なく自分の部屋に戻ると、そこにはワタシが居た。亡霊だろうか。高飛車なソイツに彼女は引け目を感じる。



第二話 一の恐怖

自殺未遂というのはこういうことなのだろうか。転落直後はかなりの痛みを感じたものの、今は不思議なくらいに身体を十分に動かせた。朝の四時、自分の部屋の丁度真下で目を開けた私は大きく息を吸い、仕方なく家に帰ることにした。立ち上がって、ウィンドブレーカーについた土をはらって、私はアパートの階段をゆっくりゆつくりと上がっていった。

「また、この階段を上るのか」

ため息と同時に扉にがくと頭をつくと、一度深呼吸をして俯きながら家に入った。家の鍵がかかっていないことはもう日常のことで、私は昨晩脱がなかった靴を玄関で脱ぎ、自分の部屋に繋がる廊下に足を踏み入れた。その時見てはいけないものを見てしまったのだ。逃げようにも恐怖のあまり足が動かない。私は声の出し方を忘れた。亡霊？ 幽体離脱？ 成仏未遂？ 私が何も言わないことで口火を切ったのはその人だった。

「い、んにちは」

私も挨拶をするしかなかった。

「……こんにちは」

「あな、たは？」

「梶田です」

私も念のため名前を聞くことにした。

「あなたは？」

「……梶田です」

幻想であつてほしかった。せめて夢であつてほしかった。聞くまでもない質問ではあったが、名前を聞いたことでより自分自身の存在が不安定になった気がして怖かった。『私以外私じゃないの』という昔流行った曲の歌詞の意味が破綻した。

「亡霊、ですか？」

相手は驚いたように自分の身体を触って確かめているが、確かめないと分からないのだろうか。

「いえ、多分違うと思います」

多分とはなんだ、多分とは。私を殺しに来たのだろうか、そんな質問にソイツは黙りこくってしまったて、いよいよ本格的に危機的状況であると察知した。そして極力刺激しないように穏便な解決を求めた。

「ここは私の家です。出てもらえますか」

それに対する相手の返答はこうだった。

「いえ、ここは私の家です」

自分よりも一回りも二回りも自信に満ち溢れたワタシの姿を見て、嫉みの感情をも持ってしまう。私の上位互換のようなオーラを放った存在で、自分がいらなと言われていたような気分になる。

「証明、できるんです？」

「ええ。榊田遥香二十二歳、父は死に、家族は母と二個上の姉の三人。あなたこそ、自分の証明できます？」
そう言われて私も素姓を並べるも、新規の情報を言えと脅されてしまった。私は少し考えて、金銭や個人情報に纏わる『ここで生活していた私』にしか知りえないような情報を提供した。

「あなたこそ、自分の家については何も触れていないのではなくて？」

「そうですね。ドライヤーは食器棚に置いている、とか」

「それはここからでも見えます。お手紙セットは？」

「未使用のものが棚の最下段にびっしり」

「裁縫セットは？」

「その二段上の棚の右端」

「まな板と包丁は？」

「まな板はキッチンの上の戸棚の一番右、包丁は足元の棚の挿し込む所」

全ての確な位置を淡々と答えるワタシの姿をみて、私はカマをかけてみることにした。自分が覚えていないもののありかを聞き出そうとしたのだ。

「昔のスマホは？」

適当な即答を期待したが彼女は返答に困っていた。

「あ、えっと……」

記憶が完璧に一致しているのである。なんとなく私はその賭けに負けたような気がして、廊下に両膝をつき肩から崩れ落ちた。

「なんで……。私が飛び降りたから？」

私が自殺なんかしてしまったがためにその替わりが現れたのだろうか。自殺なんかしてしまったがために私が霊にでもなったのだろうか。榊田遥香は、本物の榊田遥香はどっちなのだろうか。私はワタシに追い打ちをかけられた。

「とにかく、私が榊田遥香です」

自信はないが、私も榊田遥香であると答えるしかなかった。このまま榊田遥香である権利を奪われてしまった

ら、私は何者でもなくなってしまう。いつもなら世界の誰もが私のことを見てくれなかったとしても、そこには自分がいた。散歩をするときも買い物をするときも、家で横になっているときも、自分が自分を認めているから、独りでも楽しんでいられたのだ。だから、自分の存在が自分ですら分らない状態になってしまうこと、それが一番怖かったのだ。

「このベランダから飛び降りて死のうとしたのに？」

その言葉と一緒に私はスマホの画面を見せられた。そこには確かに自分が飛び下り自殺を図る直前に送信したメールの遺書の記録があつて、もう何も反論できなくなった。私は何者なのだろうか。

「榊田遥香を捨てた女がよくも榊田遥香を名乗れるな。この死に損ないの偽物が」

私はワタシを受け入れられなくなった。目の前のジブンの顔も声も存在も、その全てが気持ち悪い。もし彼女の中に自分と同じ血が流れているのなら、なおのこと気持ちが悪い。もし私の過去を全て知っているなら、それもそれで気持ちが悪い。この不快感、そして恐怖を一生引きずらなければいけないのかと思うと、私はもう禁忌に手を染めるしかなかった。私とワタシの間にあるキッチン足元の棚から一番手に取りやすい包丁を一本抜いて、ソイツに急接近した。自分の手とウィンドブレーカーは真っ赤に染まり、そのままたれかかつてくる彼女を全身で支えた。その体には確かな重みがあつて私は吐き気すら催した。包丁はそのまま床に落と

したのだが、一番の恐怖はこれからだった。十秒くらいが過ぎた時、息の根を止めたはずのヤツがもぞもぞと動き出したのだ。それも全く痛みを感じていないような素振りでも不敵な笑みを見せた。その姿はまるでクリーチャーで、ゾンビといっても過言ではなかった。ジブン相手にパーソナルスペースとしての不快さもじわじわと実感するようになり、私は彼女を突き放し、私の家から逃げ出した。行く当てなど本当になくて、今はゲームセンターに行く気持ちにもなれなかった。外で過ごす一日は長すぎる。スーパの出口付近で無料で手に入れた段ボールを公園の土管の中に敷いて寝転がって過ごしたのだが、頭に浮かぶのはずっとヤツのことだった。ヤツは復活したのだろうか。私のことを殺しに来ないだろうか。嫌な想像ばかりが働いてしまって、暫くは外の音が全く耳に入ってこなかった。午後を過ぎると小学校低学年の子たちが保護者と一緒に下校している様子が見えたのだが、私の存在に気付いた親は皆、路肩の虫の死骸を見るような軽蔑した目をしていた。パトカーのサイレンの音が近づいてきたのはそれから数分後のことで、ふと自分の手元を見ると、あいつの返り血で赤黒く汚れていた。

「誰かにチクられたんだな」

かなりまずい立場に立たされたと自覚した私は急いで公園を離れて、登下校路から離れた道を走って逃げた。警察が追ってくる様子はなく、鋭く冷たい真冬の風が吹くなか、私は血の付いたウインドブレーカーを脱いで

歩きつづけた。

「さつむ」

全力で走り続けて十数分、最寄りの西池袋駅構内のトイレに潜り込んだ。西池袋はホームレスのたまり場となっていて、座り込み禁止のポスターの目の前で座り込んでいるおじいちゃんやんが何人もいた。

「木を隠すなら森の中。ホームレスを隠すならホームレスの中、かな。彼らにも自分を証明する名前があるんだろうな」

手と腕についた血を落とし、行く当てもなくトイレを出たのだが、その後すぐ三十代後半の若い男性警官二人に囲まれてしまった。

「君、学生？ 今日学校お休み？」

優しく温かい言葉選びの裏には冷たい人間性が垣間見える。

「え、ええ」

「血。凄いことになってるけど、どうしたの？」

上着を脱いだものの完全には隠しきれていなくて、嫌な相手に目をつけられてしまったと内心焦りが隠しきれない。下手な親しさを醸し出す警官二人に対して私は素直な態度をとるしかなかった。

「これ、私の血です」

嘘はついていない。

「君の血？」

「ええ。さっき出血したんです」

「出血って、どこから？」

「は、鼻から？　それで手を洗って、トイレに。何か問題でも？」

「いや、ならいいんだけど」

「念のため、調べます？　私の血ですけど」

警察官は嘘の風を見破れる生き物である。私の曇りのない目を見て警官の放った一言は

「そうだな、一応見とくか」

だった。

やや面倒なことに巻き込まれてしまったが、これでワタシの正体が分かるかもしれないと自分の中で期待していた。もちろん、その期待と同時に一定の恐怖もあった。もし例のアイツがアイツとしての新しい別の生命体だった場合、つまり彼女の血液が私のものと一致しなかった場合、私は殺人犯として逮捕されてしまうかもしれない。

れない。こんな事件、どう弁護士が頑張ったとしても勝ち目はないだろう。

「君、免許証か保険証は？」

「あ、免許証があります」

この免許証は証明書として有効なのだろうか、とか無駄な心配をしながらもズボンに入れていた折り畳み財布からややボロボロになった免許証を取り出して手渡した。

「これでいいですか」

「ん。お、君二種免許なんだ」

「ええ。趣味で」

「はるかさんね、これ何て読むの？」

「ま、ますだ、です」

「榊田遥香さんね。はいはい、ありがとうございます、じゃあこれ返すね」

この警官二人は私のことを榊田遥香と認めてくれた。それから警察車両で場所を移すことになり、人血検査とSNP検査、そしてDNA型検査が行われ、頭がいっぱいっぱいの中で結果を待った。どっちに転んでも不幸な私は体の震えが止まらなくて、待合室の椅子で立ったり座ったりを繰り返していた。

「失礼しました。血液は全てあなたのもので間違いなかったですね。変な疑いをかけてしまつてすみません」

「まず、少しだけほつとした。」

「い、いえ。よかった」

「よかった？」

警察の勘は鋭い。解放されるまで下手なことを言つてはいけなかった。

「あ、えっと、私も貴重な体験ができて良かった、と思つただけです」

「何言つてるんです。お体にはお氣をつけてくださいね」

私は極力顔を見せないように下を向きながら数度お辞儀して退室した。

「はいっ、それでは失礼しますね」

警察に関わるのは最初で最後、なんだかそんな感じがした。私は一度も振り返らず西池袋の街に戻り、実用衣料品店のクロユニで色違いのウィンドブレーカーを買った。そこから数日間ずっと家には帰らず屋外をうろついていたのだが、持ち金が不足したために十分な飲食はできなかった。朝がきたら夜が来る。ずっとその繰り返し。一日を通して景色は殆ど変わらない。彼氏がいたら彼氏にしがみついたただけだな。だんだんと頭が動かなくなり、体が動かなくなり、最終的にはまた土管公園に戻つてきて一日を過ごした。いつもだいたい同

じ時間帯にラブラドール・レトリバーの散歩に来るおばあちゃん、今日は来なかったな、なんて考えているとすぐに夕方になった。

「ああ、ワンちゃんでもいいや、抱きたいな。誰か優しくしてくれないかな」

いつも『動くゴミ』として見ている鳩が首をふつて寄ってきて、私は鳩に負けた気分になった。生きることに限界を感じて、土管の中で虫の死骸のように地面に丸く蹲った。鳩が食べてくれるかな。



一の恐怖



一の遥香

- ・ 榊田遥香
- ・ 偏差値 72
- ・ 大入り豚まんが好き
- ・ 元バ先はレンタカー屋

目の前に現れた私の存在を受け入れられず、キッチンナイフで彼女を一突きする。

家を飛び出し彼女から距離を置くも、周囲の目に悩まされる。



二の遥香

- ・ 榊田遥香
- ・ 偏差値 72
- ・ 大入り豚まんが好き
- ・ 元バ先はレンタカー屋

目の前に現れたワタシに腹部を刺され激痛を感じながら死ぬ。しかし、十数秒後に息を吹き返したことから、だんだんと非現実的な現状を理解し始める。



第三話 四の仲裁

私は脱水症状で死んだと思っていた。いや、きっと死んだのだろう。目の前には三羽の鳩とワタシの姿があった。このヒトは誰なのだろうか。私？ いや、アイツか？ いやそんなわけはない。ウィンドブレーカーの色が違った。

「お腹空いたな」

お腹が空いて、食えずして、蹲って今に至る。私にわかることはそれだけだったが、それでもだんだんルールが見えてきた。自殺した直後、家に帰るとアイツがいて、今はここに私がいる。どうやら私は死ぬと一人別のワタシが増えるようだ。それ以外に納得のいく答えが導き出せなかった。それよりもお腹がすいて仕方がないのだが、私は蹲ったワタシに声をかけた。

「ねえ」

ゆっくりと振り返った彼女は少し怯えた顔をしていたが、私はワタシに向き合った。

「そんな顔をしないで、遥香。私は多分君の分身。私もあなたと同じ榊田遥香だけど、この世界のすべてを体験しているのは多分あなたよ。信じられないだろうけど、今はこの状況を受け入れるしかないみたい」

ワタシの性格は私が一番良く知っている。だから極力優しい声で話しかけた。きっと今のワタシが望むことは

優しく寄り添ってもらふことだと思ふ。本体であろう目の前の彼女は声を失っていた。

「私たちの着ているこのクロユニのウインブレ、これが何よりの証拠じゃない。多分だよ、多分、私たちは死ねないみたいなんだ。私は最後、今のあなたと同じようにここで埋まつて、つまり半分うつ伏せになって死を覚悟したわ。でもね、私が目覚めた時、私は仰向けに寝ていたんだ。ここで仮眠をとった時と同じ姿勢よ。けれどあなたは今の今までここで蹲つてたの。この意味が分かる？ きつと、あなたが榊田遥香本体なのよ。なにがどうなつてこうなつたかは分からないけど、私多分君から生まれた。そう思う」

「あなたは、あなたは私のどこまで知っているんです？」

彼女がやつと口を開いた。

「あなたが体験したことは知ってる」

「警察に連れていかれたことも？」

「ええ」

「私が私を刺したことも？」

「ええ。もっと前の記憶も確かにあるわ。高校生から一人暮らしを始めて一人で頑張ってきたことも、ストーリー氣質のある彼氏を一人で対処していたことも、授業料が払えなくなつて大学を辞めたことも。全部知つて

る。もっと幼かったときの楽しかった記憶も、ちゃんとある」

そう答えると本体の榊田遥香は涙を垂らして抱きついてきて、私の知らない声で泣き喚いた。

「なんでなの。もう、なんでなの。私はもういいのに。榊田遥香を捨てたのに」

私はワタシにかける言葉が見当たらなかった。けれど彼女が何故死にたかったのかは痛いほどよく分かる。いや、本当は私自身も死にたいのかもしれない。今は榊田遥香がどんどん増えてしまう不可解な事件に一人戸惑っていてそんな気持ちも霞んでいるけれど、私も本当は死にたいのだろう。どんなに努力して頑張っても最後はゼロになる、それを知ってしまったのだから。父の死は私が中学三年生の時だった。だんだん薄れていったその悲しみを今になって思い出させたのは友人と祖父の連続した死である。大学二年生の時、仲が良かった友人が交通事故で死に、その数か月後に祖父が六十五歳で他界した。そこから私の中の歯車が上手く回らなくなつて、試験も卒論もアルバイトも就職活動も、何もかもが上手くいかなくなつてしまった。ずっと頑張つてきたことが報われなくなったような気がして、毎日ふとしたことで傷つくこの人生にも疲れてしまったのだ。姉の冬華は幼いころから深刻な喘息症状で入院していて母さんがつきつきりで看病をしていた。それが故に私にはお父さんとの二人暮らしを強いられ、家族の形って何だろうって悩まされるときもあった。別にお父さんが暴力的だとか家事をしないとかなそんな不満はなかった。どちらかというところの家庭よりもお父さんとの結びつ

きは強かったほうだと思う。けれど中にはお父さんには相談できないような話もあって、そんな時には女家族を頼りたかったなとも思う。私はもう母さんの顔をほとんど覚えていない。こんな意味も分からない状況になって、頭に浮かべるのはお父さんの顔だった。でもそんなお父さんはもうこの世にいないくて、私は人生の道標を失ってしまった。感情に振り回されることにも疲れてしまったのだ。自分の帰る場所は自分で見つけるしかなくなってしまった。しかし、それよりも先に私が見つけないといけないのは食糧である。お腹がすいたという感覚を通り越して、鳩尾が痛みの信号を脳に送っている。この理屈のままでは土管公園に餓えた柵田を量産してしまう。私は近くのごみ箱に何か食べれるものが落ちていないか探しに行ったのだが、冬の枯れたごみ箱にはバナナの皮すら入っておらず、カラスもドン引くほど冷たく虚しく空っぽだった。もうどうすることもできないのだろうか。仕方なく本体の方に歩いて戻ると、騒がしい兄妹二人組に出くわした。

「わー、ママ見てー、そっくりさんだ」

「うわほんとだ、目えも、服も、全部一緒だー」

好奇心の塊のような小学生二人に目撃されてしまったのだ。彼らはランドセルを背負ったまま公園の中で遊んでいたようで、二人のママはというと公園の奥でスマホを弄っている。ありがたいことにまだ私たちのことは気づいていないようだったが、世の不思議を見つけた子どもたちの勢いは止まらなかった。

「ねーねー何で同じ顔なの？ ひよつとして同じ人なの？ 変なの。ロボット？ ママに言ちゃうよ」

似すぎというより完全に同じなのである。私自身もまだ違いを見つけられないくらいに全く同じなのである。私の本体はというはずつとだんまりを決め込んでいて、私が子どもたちの相手をしてあげることになった。

「ええつとね、私たちはね」

「分かったー、兄妹でしょー」

その男の子は元気よく話を遮ってきたので、煽てて話をあわせることにした。

「そ、そうそうそう」

「オレ知ってるよ。双子は顔似てるんだよ。カホは知らないでしょ」

一緒に連れていた女の子はカホちゃんと言うのだろうか。

「ボク良く知ってるねえ。私たち一卵性双生児だからお顔がほんつとにそっくりなの。さ、君たちもう行きな」

「ソーセージ？ ね、ソーセージだって」

「ソーセージ？ ソーセージだああああ」

ソーセージとか言わないで欲しい。その響きを聞くだけで唾が湧き水のように出てきてしまう。

「ねーなんでソーゼージだと顔似てんの？」

「つまり、あれよあれ。すつごく似てるから、似てるの」

「へー。よく分かんないけど瓜二つなんだ」

瓜とか言わないで欲しい。味や調理法が思い出せないくらいパツとしない食べ物だが、それでも今は食べ物に敏感になっているのだ。

「よくそんな言葉知ってるね。ほら、ママのここに行きな。君たちはここにいちやいけなから。立派な子になるんだよ」

そういうと、二人はうんと一回頷いて、ソーセージソーセージと叫びながらママの元へと走っていった。それにしても子どもは話を全く聞いていない。自分が話して気持ちよかったらそれでいいみたいだ。なんだか彼らは如何にも人間って感じで、私もそんな風になれば楽なものなと考えてしまった。

「いいね、ああいう若い子は。夢も元氣もいっぱい」

私の本体は高校生の青春を眺めるおばさんのような眼をしていて、私もとりあえず半分共感した。彼らが立ち去ったその場にはピンク色の交通守りが落ちていて、私はそれを何気なく拾った。そして本体に手渡した。

「ここにも長く居れないね」

「そっか」

お守りを受け取った本体はそれでもまだ落胆した様子を見せていて、その時彼女が何を考えていたのかは私には分からなかった。

「ここにおいても食糧はないし、大学生のホームレスなんて目立ちすぎるよ。それに、同じ顔が二つ並んでるって明らかに奇妙じゃない。小学生ですら不思議に思っちゃうみたいだし」

「じゃあ私たちはもう別々？」

彼女は少し顔を曇らせた。きつと嫌な顔をするだろうと思ったが、私は躊躇わずに一つ提案をした。

「いや、帰ろう？ 家に」

予想通りの反応だった。本体はもっと顔を曇らせた。

「でもアイツがいるんじゃない」

どちらが本物の榊田遥香なのか問題で議論になったもう一人のハルカのことである。私もそこまでの記憶を引き継いでいるため、帰りたくないという思いは十分に理解している。関わらなくてよいのであれば関わりたくないというのが本音である。けれど、私たちは今進むべき道を人生の選択肢から選べる立場には立っていない。一番現実的な生き方を考えなければいけないと、冷静な本体も分かっているはずである。

「うん、きつといる。でも、アイツもワタシなんだよ。アイツはこの世界の誰よりも良き理解者ではあると思う。それにあれからもう一週間くらいは経っているんだ。アイツも何か考えているかもしれない。私もいる。だから帰ろう？ 私たちの家に」

本体は頷くしかなかったようだ。瀕死の状態でも自分の家の場所は忘れていなかった。いつもの二倍の時間をかけて長い長い階段を上り、やっと自分の家の玄関の前に着いた。本体は扉から少し外れたところに隠れていて、私が先に家に入ることになった。いつも通り鍵は掛かっていな……

「え、鍵掛かってる」

自分の家にも拒絶されるとはなんとも惨めである。最後の望みをかけて私は自分の家のインターホンを一度鳴らした。お隣さんには絶対に見られたくない光景である。この静寂に包まれた時間がなんともどかしい。一分も経たないうちに部屋の内側からガチャンと鍵の開く音がしたのだが、待っていても扉は開かなかったのだ、榊田遥香軍団を代表して私が扉を開けた。玄関には予想通りのあの人が腕を組んで突っ立っていて、一言こう発してきた。

「お帰りなさい、榊田被告人」

何を言われても受け入れる覚悟をしていた私であったが、私は反射的に家の扉を閉めてしまった。包丁で刺し

たことをまだ根に持っているのだろうか。考え込んでいると勢いよく扉が開いて、

「嘘、嘘嘘、冗談冗談、まって今の無し。とりあえず入って、誰かに見られるのもなんだし」

と被害者遥香が謝ってきた。自分の家上がるのに、他人様の家にお邪魔するような感覚である。本体も重たい足を引きずって顔を出した。

「あー、やっぱり増やしちゃってたか。どっちがどっちだ？」

ヤツは私と本体を交互に見つめてきた。よく見ると彼女は私のお気に入りの紺のワンピースに着替えていた。

「ごめん、とりあえず、カップ麺でいいから何か食べさせて。話はそれから」

ほぼ最後の力を振り絞ってそう発したのだが、カップ麺は全部食べちゃったと言われてしまい、私たちは二人して玄関に倒れ込んだ。

「わ、分かった分かった。何か食べさせてあげるからちよつと待ってて。コンビニで何か買ってきてあげるから」

そうして十五分後、体感的には一時間後、ひとり一人前の焼肉弁当を食べ一息ついた。本体は割と回復したように見えたが、私は内心まだまだ空腹状態である。

「どう？ 焼肉弁当美味しかった？」

「美味しかったけど……」

本体が何かを言いたそうな顔をしている。

「けど？」

アイツが睨むように本体を見ると、彼女は恐る恐る口を開いた。

「……これ、私が稼いだお金なんですけど」

なるほど。たしかに私もアルバイトをしていた記憶はあるが、実際に経験はしていない。全ては本体の稼いだお金である。

「まあまあいいじゃん、そんな小さなこと気にしなくても。ワタシは私だし」

ヤツの一言で双方の胸にむかつきの感情がくすぶった。

「この焼肉弁当、ハッピーマーケットで千五百円もするやつでしょ？ 私だったら絶対に買おうと思わないけどね」

「いやいや二人ともろくにご飯食べてなさそうだったし、何か喜ばせてあげようと思って」

「まあ、なんて不遜で驕傲なの」

「いやいや、そんなつもりはないけど」

二人の喧嘩は止まらなかった。夫婦喧嘩も姉妹喧嘩も知らない私は、喧嘩の止め方を知らなかった。

「いや、あります。思いがつてます」

「思いがつてなんかないです」

両者のいがみ合いはまだ止まらない。ワタシがワタシと言い争っている様子はコピーである私から見ても奇妙で気持ち悪かった。

「もう辞めてよ。醜い。それで、私たちどうすんの、これから」

お腹が空いていたこともあって少し苛立った口調になったが、おかげで二人の口論はピタッと止んだ。

「ああそうだ、二人のうち本体はどっちだ？」

「私だけだ」

「ああ、やっぱりそっちか」

「何よ、やっぱりって」

「いや、態度見る感じ明らかにこっちかなって思ってた」

「悪かったわね。てかやつと私が本物って認めてくれたんだ」

本体がそう言うのと、ヤツは冷静な顔に戻った。

「二人ももう気づいているでしょ？ 私たちに何が起きているのか」

「信じたくはないけれどね」

私が間に入ることでアイツも落ち着きを取り戻したようだった。

「あなたが出て行ってから調べるだけ調べてみたの」

「何か掴めたの？」

「一つだけね」

「それって？」

「それを話す前に、現段階で分かっている事実をもとに、私たちの身に何が起きているかを推測してみようと思うの」

本体ではない方の彼女が棚からコピー用紙を取り出して、ペンをくるくる回しながら話を仕切りだした。ヤツも遥香なのだから、自分で思うのもなんだけれど根はものすごく真面目なのだろう。

「推測って言ってもそんなに情報ないよね？ 死んでも蘇る、死んだら増える、この二つくらいじゃない？」
私も姿勢を正し彼女の目を見て話すことにした。

「いや、それ以外にも思い返せばもつといっぱい隠れた真実があるんだよ」

「と言うと？」

「例えば傷」

「傷？」

本体は口をぽかんと開けっぱなしにしながら話を聞いていた。

「周知の事実だとは思うけど、そのサイコパス本体ちゃんはこの家から飛び降りて全身を強打しているはずでしょ」

「今なんて？」

「はいはい、とりあえず続きを聞こう」

「けど私たち三人誰の身体も骨折はおろか傷一つ残っていないよね。これって変だと思わない？」

「じゃあ蘇る間に傷が全部修復されてるってこと？」

「多分ね。みんな当事者だからピンと来てないと思うけど回復するのに何十分もかかってないと思うのよね」

「じゃあ、私たちにはたったそれだけの時間で傷を治す力があるってこと？」

「いや、まだそうとは断定できないかな」

「なんで？」

「私もそれが気になってちよつと浅めにリストカットしてみたんだけど、その傷は全く治る様子がないのね」

そう言つて彼女は私たちに細い傷の入つた自身の腕を見せてきた。その傷の跡はちよつと痛々しくて、本体の彼女も黙つてはいるものの私の身体になつてことするのよとか思つていそうである。しかし、思い返せばどんな傷も怪我も簡単には修復したことはなかった。彼女の言うことは一理ある。私が中学生の頃、陸上部の練習中にこけて擦りむいたときも、高校の薙刀部の模擬試合中に尺骨疲労骨折を起こしたときも、完治するまでに相当な日数が必要としていた。ただの傷ではいちいち修復しないのかもしれない。そんなことより私たちがホームレス生活をしていた裏で彼女がリストカットしていたことの方が驚きだった。彼女の中でも自分を大切にすべきか大切にすべきでないかで揺れているのかもしれない。頭の中ではカットハルカという文字列がぐるぐる回つてなんだか可笑しくなつてきた。カットステーキみたいである。

「じゃあ傷が回復するのは、死んだときだけ、とか？」

本体の言つたその推測は割と当たつていそうな気がする。

「うん。それに全部の傷が回復するわけじゃないみたい」

「とうとうと？」

「自分の右足を見てみなよ。飛び降りる前に剥いた瘡蓋が残ってるでしょ？　もし死んだときに全部の傷やケガが完治するのであれば、そこに瘡蓋は無いはずよ」

「なるほど」

「私たちは死に至る直接的な原因となった傷、つまり致命傷だけを修復できるのかもしれないんじゃないかって」

「今後ともずっと？」

「いや、それは分からない。修復にも限度があるかもしれないし、そもそも私たちが無限に増え続けられるか、無限に生き返れるかどうかも分かってないんだ」

「それは確かにそうね」

私と本体はカットハルカの話に全く同じ返事を全く同じタイミングでしていた。彼女と同じ思考回路を持つていることを改めて実感したのだ。

話に詰まって一瞬の静寂が流れた後、本体ハルカがカットハルカに質問を投げた。

「ねえ、さっき手掛かりが一つあるって言ってたけど、それは？」

「ああ、実は面白いインターネットサイトを見つけたんだ」

「面白いサイト？」

「うん。これ、ちょっと見てみて」

「『どんどん増えるあなたのお悩み解決します。川越正満』かわこえまさみつこれがどうかしたの？」

「情報ビジネスってあるでしょ？　ほら、大学三年生の時に同期の光常さんとかに誘われたじゃん。あれだよ」

「それは分かるけど、あれがどうしたって？」

「これもその一つだと思うんだ」

本体はまだ腑に落ちない顔をしているが、カットハルカの言ったことの意味を彼女が理解する前に理解した。

「なるほど。情報ビジネスの売り手側じゃなくて買い手側になるってことね」

「そゆこと」

「でもお悩み相談って言ったって、こんな物理的に死ねないっていう非現実的すぎる悩みは論外じゃない？」

「それがそうでもない気がしてて。よく見てみてよ、ここ。『どんどん増えるあなたのお悩み……』普通こんなところにスペースは入らないでしょ？　ここで区切って読むと『どんどん増えるあなたのお悩み解決します』になる。どう？　可能性ない？」

「タイピングミスじゃなくて？」

「いや、一ヶ所ならまだしも何ヶ所にも同じスペースがあるのよ。ほらっ、ここも」

「じゃあこれって、同じ悩みを持つてる人がこの世に存在しているってこと？」

「世の中に自分と同じような悩みを持つてる人は三千万人くらいいるって言うよ？」

「でもそれはもつと一般的な悩みのことでしょ？ 上司のパワハラに耐えられないとか、家族のモラハラがどうのこうのとかさ。私たちの事例は流石に特殊過ぎない？」

「そうかもしれないけど、可能性があるなら賭けてみてもいいかなって思っただけ。実はもう既にダイレクトメールでやり取りはしていてね、明日の朝、この藤原さんに会う予定なんだ」

「おお、行動が早い。何時なの？」

「朝十時とか十一時とか」

「早いな。じゃあ私たちも今日は早く寝なきゃだね」

普段夜型の榊田遥香が結んだ約束だとは思えないくらい早い集合時間である。

「待つて。ここは私一人で行こうと思ってるの」

「どうして？」

「外で全く同じ顔が三つも並んでるなんて明らかに奇妙すぎるじゃん？ それにもし私の予想が外れていたら、知らない第三者に私たちの秘密をバラすことになっちゃうと思うの。それってなんか怖くない？ だから私一人で行ってくるよ。朝起きれるかだけは心配だけだね」

私はカットハルカの行動力と、なんだかんだ忘れていない持ち前の優しさに感動した。

「ありがとう、カットハルカ」

「……カットハルカ？」

しまった。つい思っていることが口に出てしまった。

「いや、あの、助カッタハルカって言っただけよ。じゃあ私たちは家でもう少し何か情報が見つからないかい
ろいろ調べてみるわ」

「分かった。で、今日はどうやって寝る？」

カットハルカの急な話の転換に私の脳の回転は一步出遅れた。

「え？」

「ほら、ベッドは一つ。毛布を敷いている定位置は一つじゃん」

三人とも梶田遥香であるとはいえ、三人川の字で寝ることを想像するとなんだか吐き気がした。

「じゃあ私が本体だから私が定位置で」

「え、それは違う。人権侵害だよ」

「だって、もともとは私の家だよ？」

「私だって生まれてきたくてコピー人間として生まれてきたわけじゃないし」

「生まれたくて生まれてないのは私もそうよ」

「それを言うなら私たちはもっと平等であるべきよ」

ふと考え事をしている隙に二人はまた喧嘩を始めていて、やはりこの二人とは一緒に寝たくないなと思ってしまった。私の悩みは、それが現実的であろうと非現実的であろうと途絶えることはなかった。私も呑気なことを考えている場合ではない。ベッドが一つ、定位置が一つとして、何か戦いに負けた場合とんでもないところで寝させられる羽目になりそうである。戦いに勝つには自ら動きだすしかなかった。

「じゃあここは運に任せて公平に決めようよ」

二人の言い合いを割るように私は提案をし、テーブルに置いてある木製のブロックカレンダーから1と2と3のキューブを取り出して背面でシャッフルした。

「いい、1を引いた人は定位置で寝る。2を引いたらベッド。3を引いたら、そうね、キッチン前の床で雑魚

寝っというのどう？」

二人が真剣な目つきで了承したのを確認すると、

「右？ 真ん中？ 左？」

と無駄な質問をし、私は混ざらないように右手で持っていた2のブロックを除き、残り二つのブロックを二人に投げて渡した。結果、1を引いたのはカットハルカ。もちろん私は2のベッドを引いて、本体は3の雑魚寝を引いた。

「よしっ。定位置だ」

「まじかあ、キッチン前とか絶対寒いじゃん」

私は声には出さなかったものの、心の中で盛大なガッツポーズを決めていた。榊田遥香は究極に頭が切れる反面、肝心なところで天然であることが初めて役に立った。

「なんだか面倒だからお風呂入る順番とかそういうのも全部この番号に従わない？」

「いいわ」

三人における多数決というのはやや強引なもので、どちらか一人が頷く話をしておけば自分の思い通りにことを動かせるということにも気づいてしまった。私も皆と同じように自分の引いたウッドキューブを自身のポケ

ットの中にしまつて早々にベッドに上がった。いつも定位置でばかり寝ていたけれど、今ここで改めてベッドのありがたさに気が付いた。明日の朝もベッドの上ならば無理矢理起こされることはない。

「こりやあ極楽だわ」

ベッドに何か食べ物でも持ち込もうかな。私はまた二人の口論を横目にキッチンを漁りに行つた。久しぶりに人間として生きた気がする。これは余談であるが結局キッチンには何もなかった。

「明日朝一何か買いに行くか」

私はそもそも朝の早起きが本当に苦手なのだが、食事の為ならなんだかんだ起きれる気がする。そういえばカットハルカはあんな早くに起きれるのだろうか、そんな心配事が頭を過つた。

四の仲裁



一の遥香

- ・ 榊田遥香
- ・ 高校薙刀部
- ・ 父親に育てられた

全遥香の考えが一致し、
本体遥香であることを認められる。未だにアイツ
(二の遥香)とは不仲。

自宅からの
飛び降り自殺
によって誕生した「アイツ」

重篤な
脱水症が原因で死に、誕生。

カットハルカ (笑)

二の遥香

自身の腕を傷つけてまで、
誰よりも早く謎を解明しようとする。
生きようとする思いが強い。

四の遥香

自身の服や目覚めた場所から自分がコピーだと実感した。
空腹には勝てない。

第四話 一の行動

室内は暖かかった。けれどキッチン前の床は冷凍庫の中で固まった板チョコのように冷たく、起きた時にはかなりの疲労感を感じていた。もちろん屋外で寝るよりはましだったのだが、私も布団を被ってゆつくりと寝たかった。昨晚は寝るに寝れず夜中の三時くらいまで考え事をしていて、今日は朝十時に目を覚ました。うつ伏せのまま起き上がって私は体を伸ばした。ヤツは十時半に家を出ると言っていて、今はシャワーを浴びている。

「ああ、水道代が三倍になるなあ」

死んでいたら考えなくてもよいような小さな悩みにも敏感になってしまった。もう一人の私はというと眠い目をこすりながら朝からキッチンを漁っていて、非常事態用にとっておいた乾パンをポリポリと満足そうに食べている。髪を乾かし終わりいつもより少し濃いメイクをしたヤツは、そろそろ行くねと言って私の前を通り、玄関で靴を履こうとしていた。

「あのさ、別の服着ていったら？ そのウインブレ血の跡がついているでしょ」

「血をつけたのはあなただけだね。痛かったんだよ」

ヤツは私をまじまじと見つめて、視線を外さないまま着ていた上着を玄関に脱ぎ捨てた。私はごめんと一言添

えてクロユニで買った色違いのウィンドブレーカーを手渡したのだが、自ら目を合わせることはまだできなかった。

「定位置、今は使ってもいいから」

そう一言残してヤツは家を出て行った。素直になれないところは私本体の性格をそのまま引きずっている様である。私は家の鍵を閉めることもなくそのまま定位置にスタスタと歩いて行って、毛布に包まってもう一睡しようとしていた。昨晚よりは全然眠れる。このまま夢の中に落ちていこうとしたその時、もう一人の遥香に声をかけられて私は心地よい睡眠時間を阻害された。

「ねえ、私ご飯食べに行つてきてもいい？」

「うん、好きにしなよ」

「いやほら、そのお財布は本体のじゃん？」

「もうそれはいいよ」

「あ、そうなんだ。ありがとう。その、一緒に行く？」

彼女は私が大学一年生の時に買って数年眠らせていた青いパーカーに着替え、私と話を続けた。

「ううん、私は全然お腹空いてないからいいや」

「あ、そう。分かった。コンビニでおにぎりとかも要らないのね？」

「うん、行きたくなったら自分で行くからいいや。私はとにかく安らかに眠りたい」

「死にたがりの発言だな」

「ちやかすなよ。つてかなんでそんな懐かしい服」

「ほらあんたはいつも白い服でしょ？　今も白TEEシャツだし。だったら全然違う色の方が差別化できるかなって思ってる。ほら、持ってる服って白い服ばかりじゃん」

「それはたしかにそうだけど」

「ま、とりあえず行つてきまーす」

そうして家の扉が完全に閉まると、久しぶりに一人で落ち着ける時間が訪れた。思い返せば私が飛び下りを図って以来初めてである。人生で一番大きいため息をついた後に、さっき受け取った交通守りを机の上に放り投げ、定位置に座り込んだ。身体の中をぐるぐる巡る血の流れを意識し始め、じわじわと生きていることを実感する。

「疲れた。やっぱり一人の方が楽でいいや」

起きたばかりというのに長い欠伸が止まらない。十時のアラームにたたき起こされたからだろう。暖房の音が

聞こえる。ゆったりと流れるそんな時間を満喫していた時、その暖房の音と正反対の領域の耳障りな音が数回鳴った。インターホンの音である。忘れ物でもしたのだろうか。鍵は閉めていないし普通に入ってくればいいのと思って私はまた目を閉じた。するとゆっくり扉が開く音がして、続けてドタバタとこつちに向かつてくる足音がした。

「キヤアアアーーーー」

空気とともに自分の体が裂けるような甲高い悲鳴が突然聞こえてきて、私は飛び起きギョつと目を剥いた。目の前に立っていたのは中学の頃の友人の長崎由依であつた。

「よかった」

そう安心して由依とは対照的に、私は唐突すぎるこの状況を一厘も、いや一微も一漠も理解できなかった。

「なんで人の家に勝手に入ってきて由依が悲鳴上げてるの？」

間違はなく今一番悲鳴を上げたいのは私である。

「何って、あんたが遺書なんかメールで送ってくるから」

「あつ」

由依は私が遺書メールを送信した唯一の親友である。私は遺書を送っていたことすら今の今まですっかりと忘れていた。

「まさかあந்த、あれ酔った勢いのまま冗談で送ったとかじゃないでしょうね」

「いやいや、そんなんじゃないよ。第一私お酒ダメだし。その、何ていうか、死ねなかったんだ。いろいろあった」

流石に今までにあったことを要約することなんてできなかった。

「そっか。とにかく良かった、生きてて。部屋に入った時血の付いたシヤカシヤカが落ちてたからもう間に合わなかったかと思ったよ」

「い、ごめん」

ウィンドブレーカーのことをシヤカシヤカという彼女独特の古臭さに懐かしさを感じた。

「いいよ、遥香が生きてたんだから」

由依はそういつて涙のしずくをつうつと零したが、私はシヤカシヤカのことと頭がいっぱいだった。昔から他人との会話の中で変なところに引っ掛かつては、自分の心の中で込み上げてしまった笑いを抑えようとするのは私の脳内の特徴である。

「ねえ、投稿みたけど由依って韓国かどっかに行ってたんじゃないの？」

「うん。研究の下見みたいな感じだね」

「医学部も大変なんだ？」

「そうなの。また明日にでも韓国に戻るかな。その次はラトビアで、その次はベルギー」

「明日？」

由依の詰め込まれたスケジュールに頭の中が痺れた。

「あんたがあんなメール送ってきたから慌てて帰国したんじゃない」

「ごめん」

「ごめんじゃないわよ。携帯に電話かけても全くでないしさ」

「えっ、うそ。それは本当に気づいてなかったかも」

「ま、もういいわ。でもちよつとは相談してほしかったな」

私は親友を放って死のうとしてしまっていたことに少し罪悪感を抱いた。

「なんていうか、誰に相談していいか分からなくてさ。生きることが辛いつて、身近な人に話したらこれまでの関係が全部狂っちゃいそうだったし。でもカウンセラーとかそんなに仲良くない人に相談したところであり

きたりな話とか自分語りくらいしか返ってこなさそうだし。心に響かないんだよね、そういうのは。自分の人生だし自分で決めよって思っちゃったんだ」

「分からなくてもないけどさ。遥香ってめちゃくちゃ真面目だし。でもこういう時真面目な人に限って選択をミスるんだよねえ。今度からなんかあったらさ、私に相談してよね。私ちよつとやそつとのことでは驚かないから」

そう言っただけで私の部屋の中を軽く物色し始めた。私は体制を整えなおしたのだが、ズボンのポケットに入っていたキューブがお尻をグイッと刺していたかったので、それを取り出して机の上に放り投げた。

「ありがとう」

「ねー遥香の部屋、全然片付いてないじゃん。掃除どれくらいサボってたのよ」

「えっ、なんか死のうかなとか考えてると、掃除とかどうでもよくなってきたさ」

「ほんつと馬鹿だねえ、あ、これが噂の写真かぁ。高校の大会の写真でしょ」

彼女が手にしていたのは、私が薙刀部で県大会一位になった全盛期の時の写真である。

「わ、こっちは見たことあるぞ。中三だっけこれ。長距離決勝での記念写真だね。私も若いなあ。これは遥香のママパが撮ってくれた写真だっけ？」

ママパとは由依語で母方の祖父という意味である。彼女が手に取っていた写真は二人が陸上部のエースとして出場した試合での一枚だった。

「懐かしいよね」

「私たちずっと一緒にいたけど、校則のせいで全然写真撮れなかったよね」

「たしかに。いやあまたあの頃に戻りたいな、切実に」

「そうねえ。なんてったって私たち二人は浜浦町中学陸上部長距離の星だったもんね」

「それもどうせお世辞でしょ？」

「いいやそんなことないよ。特に遥香は部を長距で関東大会まで連れて行ってくれるアツシーくんって呼ばれてたんだよ」

「え、そんなあだ名ついてたの？」

「裏ではみんなそう呼んでたよ」

「なにその古臭いあだ名。てか誰がつけたのよ」

「顧問」

「顧問？！」

「あと校長もそう呼んできた」

「まじか。てか学校からそんな風に見られてたのかよ」

「それだけ期待されてたってことだよ」

由依の口元は嬉しそうに緩んでいた。

「でもこんな贅沢な思い出残して死のうとしてたとか。ほんっと信じらんない」

「だからごめんって」

「懐かしいよね。この試合、たしか遥香だけがそのまま次の試合にも行ったんだっけ。凄かったな」

「もう今となつては落ちぶれ切ったけどね。高校で武術太極拳を始めて大会優勝もして、更には医学部入って今や全国を飛び回ってる由依に比べたら私なんて全っ然」

「そうねえ」

「ちよつとは否定してよ」

「そりゃ死のうとしてた人よりは落ちぶれてないもん。でもまあ好きなことだったし自分がやりたいことだから、たまたま全部上手くいったのかもね」

私は久しぶりに友達と話せたことが嬉しかった。

「ねえ、遥香のエネルギー源ってなんだったの？」

「というと？」

「ほら、別にもともと陸上とか薙刀とか、やりたかったわけでもなかったんでしょ？ 最初水泳部がいいとかって言ってたじゃん。だけど部活決定ほぼ最終日にいきなり陸上部に飛び込んできてさ」

「うん」

「それなのに何をやらせても一位とか金メダルとか取っていくから凄くなって思ってた」

「うーん、強いて言うなら羨ましさとか？」

「羨ましさ？」

「仮入部の時にモテた先輩とか見てあんな風になりたいなって思ったし、きっと二位じゃ満たされないっていう思いがあったのかも」

「憧れって感じかな。大事だよ、そういうの」

「いいや、疲れるだけだよ。今も由依のこと活躍してて羨ましいなって目で見てるし。本当は由依みたいになりたかったのかも」

「辛いことだらけだね」

彼女はそういつて写真を柵の上に戻すと私の方に近づいてきた。

「ねえ、急に帰国してきたから泊まることか全く考えてなかったんだけど、今日一日とかちよつとここでゆっくりしていい？」

その時、ふと頭の中に冷ややかな緊張が走った。増殖してしまったもう二人の私の存在をすっかり忘れていたのである。由依はちよつとやさつとのことでは驚かないとかなんとか言っていたけれど、流石に私がもう一人二人と現れたら、彼女はきつとショックで気を失うだろう。このまま由依が私たちに遭遇してはいけないと思った私は、早速約束を破ることはなるが何とか誤魔化そうと決意し、上手い言い訳も見つからないまま口を動かしていたのだ。

「だ、だめっ」

「え？ まじ？」

「まじ。いや、そのっ、なんていうかつ、嫌とかじゃなくて、あのおおー、用事があるからっ。この後」

「死のうとしてた人に大した用なんてないでしょ。水道代の支払いとか？」

「酷いな」

「玄関の床に投函されてたよ」

「違うって」

「だいたい、彼氏とも別れて就職先も決まってるじゃないし、朝から毛布に包まって寝ていられるほど暇なんですよ？　予定も何もないじゃん」

私は反論できずに黙ってしまった。

「ごめん、言いすぎた」

「いや、いいの。あ、じゃあほらさ、私お腹空いたし、ご飯にでも行こ？　外に」

「そうねえ」

「全部私の奢りでいいからさ」

「ほんとに？　分かったよ」

何とかこの場を回避することを考えて私はせかせかと白パーカーに着替えて財布を手にとったのだが、次の瞬間私の家の扉が開いてしまった。

「ただいま　ファミレス待ち時間長すぎたからコンビニ飯にしちゃった」

食事をしに行っただけの遥香が予想よりも早く帰宅してしまった。

「えっ、由依？　何で家にいるの？　久っしぶり！」

今一番恐れていたことが目の前で起こってしまった。私の頭は真っ白になった。由依の目力は一回り強くなって、いたものの悲鳴は上げなかった。きつと想像以上のショックを受けたのだろう。私はなんとかフォローしようと口から散々な出まかせを飛びださせた。

「お、お、お姉ちゃんお帰り〜」

返ってきた遥香もやや動揺しながら私に話を合わせてくれた。

「あ、あ、うん。ただだつ、ただいま。やつぱりずっと病院飯だったからハッピーマートが何倍も美味しく感じるや〜」

「こ、この後外で予定があるって、いいい、言つてなかったっけ？」

「う、ん。あつ、じゃ〜お姉ちゃんはこちらで」

返ってきたばかりの遥香が家の外に出ようとしたとき、由依が冷たい声を吐いた。

「誤魔化さなくていいわ」

「ゆ、由依、言うの遅くなってごめんね。お姉ちゃんが退院して、その、今一緒に住んでるんだ」

「うゝそだ。冬華さんには何回か会ったことがあるけど、遥香より見た目ももっと色白だし性格も全然違うじゃない」

「いや、あの、何ていうか」

私は完全に言葉に詰まって玄関にいる遙香も俯いたまま動けなくなってしまった。

「そういうことかあ」

由依は壁に背中をびったりとくっつけて、猫のように背中を丸めると深く深くため息をついて座り込んだ。

「由依？」

もしかして、由依は本当にちよつとやそつとのことでは驚かない生物なのだろうか。いや、確実にちよつとやそつとのことではないと思うのだが、私は一言謝って、驚かないのかと声をかけた。

「うん。だって私、大学病院で丁度この研究をしてたからさ」

驚いたのは私の方だった。今は驚きを通り越して膝が震えている。もう何から質問すればいいか分からなかった。

「知ってるの？ この、現象。病院ってなに、え、これ、病気なの？」

「いや、何ていうか、言いくいんだけど、病気って言うより変異って言う方が正しい、かな」

玄関で話を聞いていた遙香はとりあえずレジ袋を抱えたままリビングまで上がり、ポケットの中に入っていた財布と外でもらってきたポケットティッシュとブロックカレンダーのキューブを机の上にそつと置いた。

「ねえ、その研究の話、もっと詳しく聞かせてもらえない？」

彼女がそう言うのと、由依は口をつぐんで少しだけ迷った顔を見せた。

「遙香、この研究はまだ世界では知られていない内容なの。だからほとんどが最高機密事項なんだ。だから絶対他の誰にも言わないってことを誓ってくれば話すけど、どうする？」

「分かった」

「……誓うわ」

由依に体を向けて目を合わせると、彼女は私の家の扉と窓を全て閉めきってゆっくりと話し始めた。

「私は西京学院大学医学部生物学応用生命科学、特殊遺伝子専攻つてところに所属してるの。生物学応用生命科学はもともと動物の進化と退化について研究していた学科なの。チャールズ・ダーウィンつて中三の理科の授業で岡本先生から習ったの覚えてる？」

「岡本小路先生ね」

「そうそうそう。ダーウィンは種の形成理論を構築したイギリス人の自然科学者なんだけど、彼は全ての生物種が共通の祖先から長い時間をかけて自由選択によって進化したって唱えたんだ。大昔の話をするね。海で暮らす生物達はヒレや毒をもって食糧争いをしたの。水中での生活に限界を感じた生き物達は陸に上がるように

なって、豊かな土地の上で固有の種を残そうとしたわ。彼らには手足が生えて次第に大陸を縦横無尽に移動するようになったの。陸上での居場所がなくなった生物達には翼が生えるようになって今の社会が築き上げられたわ。以上は一つの種が魚類、両生類、爬虫類、哺乳類そして鳥類に進化していく話。こうして長い歴史の中で生物は独自の発展を遂げてきたってことまでは世界共通の認識だと思うわ」

「あんときは理科なんて何の意味があるんだろうとか思ってたな。エネルギーとか慣性の法則とかわけわからないのばかり」

「ねえ、ちゃんと聞いてね。だんだん大事な話になってくから。アメリカの経営学者、レオン・メギンソンって人はダーウィンのその考え方を受けて『生き残れるものは変化する者』であるって言っていたの。でもね、私たち人間っていう種は進化しすぎてしまったんだ。アウストラロピテクスでもジャワ原人でもなく、ネアンデルタール人でもクロマニヨン人でもなく、あくまでも進化しすぎたのは人間。言葉を使えるようになって求愛行動も複雑化したし、通貨が生まれて詐欺やスリが行われるようになったでしょ。倫理観が植え付けられて正義がぶつかることもあるし、火が使えるようになった挙句簡単に人を殺せるようになってしまったの。これは明らかに野生として生きるよりもストレスが多いんだ。西京学院大学医学部の精神科の研究によるとね、ヒトは追いつめられると『二種類の死』を求めるようになるらしいんだ。他人を殺すか、自分を殺すかの二択」

由依の話を聞きながら私は自分の犯した二種類の殺人を頭の中で思い出していた。

「他人を殺すか、自分を殺すか……」

「人間はね、自ら創り上げた高度な社会で自滅するようになったんだ。死つていう概念があるのが人間だけだからっていう理由もあるだろうけど、自殺をする生き物ってこの地球上のどこを探しても多分人間だけなんだ。ウイルス感染症による死者数より自殺者数の方が上回ってるっておかしな話でしょう？ それでね、ここからが本題」

由依はもう一度周囲を確認し一度深呼吸をした。

「人間は自殺という死から身を守るために、新たな領域に進化しようとしているの。その要になるのが分裂細胞。私たちはその分裂細胞を持つ人間を分裂人間と呼んでいるんだけど、まだ実態は掴めて無いことだらけなんだ」

「分裂、人間……」

「うん。日本では一日約三千人の人が命を落としているってことを踏まえると、多分この分裂細胞を持っている人間は極端にマイノリティってことになるかな」

「そのマイノリティに私が選ばれてたってこと？」

「そうだね。どうやって分裂しているかとかは今の科学技術じゃ証明のしようがなくて苦戦しているんだけど、それでも日々いろいろ分かっていることはあるんだ」

「どんなこと？」

「例えば、復活するとしても死ぬ時には痛みを感じてしまうこととかね。遥香も二人いるってことは一度死を経験しているんでしょう？ その時の痛かった記憶は多分まだ新しいと思うんだ」

「なるほど、確かに」

「この辺りの詳しい資料は近いうちに見せるよ。研究室に分子生物学連合学会元会長の二宮教授がまとめた資料があるんだ」

「ありがとう」

「ただ、一つ、約束して。自分が分裂していること、自分の名前と身元、住所、これは絶対に誰にも言わないで。遥香が危ない目に合うから」

由依がいつもより陰しい目つきで私を見てきたのだが、私の頭の中にはある人物の顔が浮かんでいた。朝十時過ぎに家を出て行ったヤツである。

「由依、もしかしたら第三者にバレちゃってるかも」

「どうして」

由依は食い気味に聞いてきた。

「実は私、もう一人いるんだ。全部で三人。そのもう一人が今東池袋駅周辺のカフェで人と会ってて」

「人って誰？ 知り合い？」

「いや、知らない人なんだけど、SNSの投稿でお悩み解決しますみたいな情報ビジネスやってた人だったから信用して話を聞きに行ってるんだ」

「そのページ開ける？」

「うん、えっとこれ」

私がスマホを由依に渡すと、由依は早口でその文面を読み始めた。

「えっと、『どんどん増えるあなたのお悩み解決します。川越正満』『朝が苦手なあなたへ』『最近よくお腹を下すあなたへ』」

「このページのココ見てみて」

「『最近自分のそっくりさんを見かけたあなたへ』『自分と向き合うことが怖い人へ。対処法教えます』かなるほど。ビンゴとも言えないけど、微妙だな」

そういつてプロフィールページに飛ぶと由依は焦った表情を見せた。

「川越正満って人、アオイイルカだん青海豚団じゃない」

「青海豚団、って何？」

「防衛省が直轄する機関よ。政府が絡んでる組織なんだ。このトブ画に写り込んでいる建物に、小さいけどひっくり返った海豚いるかの絵が描かれてるでしょ。これが彼らのシンボルなの。黄色いイルカの絵なのに何で青海豚って組織名なのかは私も知らないけどね」

「そうなんだ。でもまあ、政府の機関なら安心だよな」

「いや、寧ろその逆よ。これは全く安心できない。何とかしてそのもう一人の遥香を呼び出せない？」

「なんで？」

「政府は分裂細胞が世に出回らないうちに開発を進めて悪用しようとしているんだ」

「どういうこと？」

「分裂細胞を持つ国民を拘束しては非道德的な実験を繰り返して、最終的には人工的な分裂遺伝子を生み出す気なんだ」

「そんなことしてどうするの？」

私は正直、由依の言っていることを全て信じる気にはなれなかった。ただ、人間が増殖するという非科学的なことを前にしては、無理矢理にでも信じざるを得なかった。

「分裂人間は『系譜上直径の個体の死ぬ前までの記憶』を、以降生み出すコピー先に対して残存することができのね」

「記憶を引き継げるってことでしょ？」

「うん」

「つまり？」

「つまり、その力を戦争に応用させることができちゃうの。戦争の訓練を受けた優れた兵士や特攻隊、戦闘車両の免許を持った者達にこの分裂遺伝子を注入することで、彼らを無限に増殖させることができるかもしれないんだ。この技術の完成が最も効率的にクオリティの高い総力戦を実現させるトリガーになってしまうってことなの」

「でも日本が戦争をするだなんて考えられないよ。過去に原子爆弾を二発食らってポツダム宣言を受諾したじゃない」

「分裂細胞を使って戦争するのは日本じゃない」

「どういふこと？」

「武器輸出だよ。何年の出来事だったかは忘れたけど、武器輸出三原則が防衛装備移転三原則に変わったんだ」

「それが？」

「遥香、そんなことも知らないの？ 今は長くなるからあとで調べといて。これまでも最新鋭のレーダーとか戦略的兵器を作ってきたけど、それらと同じように売りさばくはずだよ。防衛装備庁もできたしね」

「どこに、売るの？」

「多分中国」

「中国？」

「武器輸出大国の日本政府は経済大国の中国政府に対して、最新兵器としての分裂遺伝子を数兆円で売り払うつもりなんだ」

「そんな計画が？ でも中国に渡るなら実質無害じゃん」

「無害なわけあるか。死ねない体になった遥香にとっては拷問の毎日を繰り返すことになるかもしれないんだよ？ それに完成した分裂遺伝子が中国に行ったとして、まず始まるのは米中戦争。米中双方に武器を売りつ

けて戦争産業で日本政府は自国を潤わせる気だろうけど、そのあと戦勝国にぶつ潰されるのは目に見えてるでしょ。私が韓国に飛んでいたのも、自殺率が世界二位の国で分裂細胞の研究がおこなわれていないかどうかの下見だったの。韓国は国土面積が小さいから分裂人間は見つかりやすそうだし、下手したら代理戦争が起きかねないからね。とにかく、特に政府機関に分裂人間を近づけてはいけないんだ」

「でもまだその川越って人が確実に政府の人って分かったわけでもないじゃない。たまたま海豚の絵が描かれてある建物の前で写真を撮っただけで、江の島マリンパーク水族館かもしれないし」

「いや、そうとは考えられないよ。情報ビジネスってそんな簡単に儲けられるわけじゃないの。だから提供者はよりマジョリティが抱える悩みに寄り添おうとするはずなんだ。でもこの薄いテーマを見てよ。流石にペルソナは狭すぎるし金額も安価すぎる。普通だったらリストも取れないし利益になんかならない。だから分裂人間を誘き出す畀だとしか考えられないんだ」

「それは確かに」

「いい？　とにかく彼女に連絡して。何も話すなって」

「分かった」

そう言って私はヤツの携帯電話に発信するも全く繋がらなかった。

「なんでだ、切ってるのか？」

電話がつながらなくて少し焦っていると、もう一人の遥香が大入り豚まんを食べながらヒントをくれた。

「ね、自分の電話だからダメなのかも」

「どうということ？」

「私たちが死ぬときに身に着けていた持ち物は、多分全て分裂していたはずなんだ。その時に着ていた服も、ヘアゴムも、ポケットに入っていた煙草も。つまり彼女が今持っているスマホは私たちが持っているものときっと全く同じなんじゃないかな。電話ってたしか電話番号だけで通信してるわけじゃなかったよね。もし電話番号だけで識別したらネット接続みたいにアドレスが競合しあって全部の携帯が使えなくなるはずだよ」

「じゃあ、どうすれば」

「私そういう通信については詳しくないんだけど、正規に登録したシムカードを挿し込んだ機体だけが反応するはず。だけど分裂した携帯が正規の携帯って認められない可能性もあるし……。由依！ とりあえず私が遺書を送ったメールアドレスに逃げろって文面で今すぐ返信して。で、私たちはスマホの電源を落としてシムカードも抜いこう」

「どうということ？」

「メールなら基本どの媒体からでもログインしていれば見ることができるし、必ず受信できるはずよね。でも私たちの携帯がオンになっていると、最悪私たちの方にだけ通知が来て向こうの携帯に通知が入らないかもしれないじゃん」

「なるほど」

「あとはアイツが見てくれるか次第ってことか。でも通知音、鳴るかな？」

「昨日の夜、アイツ朝のアラームを気にしてたんだよ。そこでスマホのマナーモードを解除しているはずなんだ。きつとうまくいくよ」

私は絶望的なくらい朝に弱く、アラームをかける時にはマナーモードを解除していることが癖づいている。この判断は自分を信じての判断だった。これ以外に方法がなかったとも言えるが、私たちは由依の携帯への折り返し連絡を期待しつつ、軽く変装とメイクをして西池袋駅周辺まで飛び出すように向かった。なんとも奇妙な恰好ではあるのだが。



二の遥香

- ・榊田遥香
- ・中学陸上部

この謎の秘密を知ってる人がいる。
話を聞きにいかなくちゃ！

飛び降り自殺で誕生。

一の遥香

一人の時間を楽しんでると、そこに
親友の由依が！ なんでいるの？！
秘密がバレちゃう！



長崎由依

遥香からの遺書を受けて緊急帰国。
医学部での研究が遥香の謎を解き明
かすカギになる。
遥香とは中学の陸上部で知り合った。



四の遥香

お腹空いた……。コンビニで大入り
豚まんを買って帰ると家には、
由依！ 久しぶり！ あっ。

脱水症が原因で誕生。



第五話 二の逃走

定位置の睡眠は極上だった。九時のアラームで目覚めた私はスマホをマナーモードにしてからシャワールームに向かった。シャワーを浴びて頭が温かくなると、つつい体を手を止めて考え事をしてしまう。柗田遥香が分裂していることは早々に受け入れられたけれど、居ても立っても居られない大きな恐怖がそこにはあった。

「もし、分裂した柗田遥香が一つの生命体に戻るとしたら、誰が消えるんだろう」

風呂の外にいる二人には聞こえないように、シャワーの音に隠れて不安を小声で口にした。

「本体か、一番優れた人か、一番初めに謎に気が付いた人か。或いは一番生命力が高い人か。ん、生命力って何だろう。体力？」

生きていた時の記憶はどうなるのだろうか。たった今生きているという証はどこに残り続けるのだろうか。それとも全て無かったことになるのだろうか。高慢と思われるかもしれないけれど、この面子で考えれば断然私が生き残るべきであろう。だからこそ、今日の朝十時半に川越正満に会う人は私でなければいけないのだ。風呂場を出て髪の毛を乾かし、白シャツを着て、玄関に置いてあったウインドブレーカーを手を持った。そして床で寝ていた本体ちゃんの横を通って玄関まで出た。

「あのさ、別の服着ていったら？ そのウインブレ血の跡がついているでしょ」

親切なのか何なのか、本体ちゃんが新しいウインドブレーカーを手渡してくるも、その悪気の無い振舞いを見るとやはり腹立たしい気持ちになってしまう。

「血をつけたのはあなただけだね。痛かったんだよ」

今でも包丁で刺されたときの抉り出されるような激痛と痙攣は忘れられない。昨晩本体遥香がキッチン前の床で寝るといづくじを引いてしまってから、またナイフで一突きされるのではないかというそわそわした感じが、一晩中収まらなかったのだ。私はせめてあの一夜のことを詫びてほしくて彼女をまじまじと見つめたものの、一切求めていた反応は返ってこなかった。同じ榊田遥香なのにこういう時に限って考えていることは伝わらないんだな、と少しがっかりして、脱いだ上着をその場に脱ぎ捨てて西池袋駅に向かうことにした。朝一で出かけるのはいつぶりだろうか。大学に行っていた頃も三時限目の授業からしか受講していなかったのだ、本当に数年ぶりの朝の景色かもしれない。今日は休日なのだろうか、朝から小中学生たちが公園で遊んでいて、カフェに向かう途中で生意気な二人組のガキにソーセイジソーセイジと野次を飛ばされた。それからもう数十分とかけて歩き、やっと目的地付近までたどり着いた。

「いこか」

私はスマホの地図アプリを頼りに何とか指定されたカフェを見つけることができたが、川越正満と名乗る男を見つけられる自信はなかった。建物は地下一階から地上二階までの三階建てで、一先ず何も注文せずに地下へと潜った。地下のスペースは半個室になっていて小学校の先生の机間巡回のように一席ずつ覗いて回った。昼近くのカフェにはいろんな人が座っているのだが、変な勧誘を受けている人が多かった。そのほとんどが詐欺まがいの情報商材系か宗教勧誘のどちらかで、儲かりますよといったスライドをパソコンで見せられている人がぞろぞろといた。世の中なんてそんなものなのかと思いつながりきよきよとしている私の行動を怪しいと思ったのか、奥の席から一人の男性が歩いてきて私に向かって声をかけた。

「榊田さん？　かな？」

「あ、はい。もしかして川越さん？」

シワのついていない紺色のスーツを着こなした茶髪の若い男性は笑顔を絶やさず私を迎えてくれた。

「ええ、川越正満です。よろしくちゃんね」

「よろしくお願ひします」

ここから先は彼に連れられるがまま通路を進み、指定された席に着くと私は席に座り姿勢を正した。ポケットからスマホを出すすゝと背面を上にしてテーブルに置き、軽く周囲を見回した。客足はまだ少ない方である。

「今日は来てくれてありがとうね。あれなんだね、思ってたよりずっと若くてかわいらしいね。大学生？」

「ええ、もう辞めちゃったんですけどね」

そんな当たり障りのない雑談から話が始まったかと思うと、彼はいきなり本題に沿った話を振ってきた。

「ね、変なこと聞けどさ、もし自分がもう一人いたら二倍働けて大金持ちになれるのにな、とか思ったりしない？」

きわどい質問だった。このままターゲットが「自分が増える」というテーマを重視しなかった場合、パソコンを使って儲けられますよとテーマにそのまますり替えるつもりなのだろうか。

「そうですね」

「もしも、もう一人自分がいたら、どうしたい？」

周りの人が聞いてもただの妄想夢物語にしか聞こえないだろうけれど、私にとってはビンゴだった。

「もし自分がもう一人居たら、そうですね、仲良くしたいですね」

「仲良くねえ。それって、俺と？」

「いえ、その増えた人です。現実はその甘くないと思いますけど」

「なんで、そう思うんだい？」

「ワタシは私が嫌いみたいなので」

川越さんは目の色を変えて少し前のめりになった。

「じゃあやっぱり」

「ええ、この話が目当てです」

私と川越さんの間に共通認識が生まれた瞬間だった。

「それで、どんなことを知りたいんだい？」

「知っているだけのことは聞きたいですけど、まずはこの力が何なのかを知りたいですね」

「なるほど。君は自分の死を身近に感じたことがあるかい？」

やや遠回しな表現で話してくるあたり、川越さんも本当に話していいのかを探りながら確認しているのだろう。

「はい。ワタシ自身が死にました」

「なら話が早そうですね。ちょっと耳を貸してください。大丈夫、息を吹きかけたりはしないんで」

ちよこちよことセクハラ紛いの発言を繰り返す彼に私は耳を傾けた。その瞬間だった、耳に鋭い風が当たって私は不意に声を漏らした。

「ちょっと、何するんですか」

「ごめんごめん、冗談冗談。次はしませんから」

そう言つて彼は立てた人差し指を鼻の前に持つてきて、前のめりになつた私の耳元に顔をスライドさせると、
こう囁いた。

「簡単に言えばこれは自身の復活能力と増殖能力です」

私は少しほつとして、そのまま姿勢を保ちながら会話を続けた。

「そうみたいです。それで、私は最終的に一人の人間に戻るのでしょうか。それとも分裂してしまったらこのまま生きなければいけないのでしょうか」

「やっぱりそれ、気になるよね」

「はい」

「ごめんね榊田さん、本当は今ここでいろいろ教えてあげたいんだけど、ちょっと事情があつてね」

「はい」

「多分何となく気づいているとは思うんだけど、この話つて他人に聞かれちゃまずい話なんだ」

「まあ、そうですね」

私たちの席の周辺には数人の若い男性客が座っていたが、みなそれぞれパソコンを開いて仕事をしているようで、私たちの存在には気づいていなさそうだった。それでもここで話すべき内容ではないことを私も重々理解はしていた。

「それにね、僕たちが集めたこの情報についてのいうは凄く貴重なデータで、ZETAを結んでそれを守って欲しいんだ」

「それからでないとお話ししていただけないってことですね」

「そうなの。だから今ここでできることは秘密保持の契約書にサインをすること。それが終わったら一緒に僕たちの事務所に移動して、本題に入るっていう手順を踏みたい。まあ、とりあえず名前を書けばすむ話なんだ。大したことないでしょ？ たったそれだけだよ」

「分かりました」

「それで、契約書って言うのは」

「今から説明するね。内容はそんなに難しいものじゃなくて、秘密を守れますかって話。全部読んでもらって問題なさそうだったらこの二枚に今日の日付と住所、名前をかいて拇印を押してほしいんだ」

「分かりました」

私は一通り書類に目を通したのだが、どんな情報が機密情報に該当するのか、契約の趣旨と問題点、情報管理等についてなどが予想以上にびつしりのこと細かく書かれてあった。

「あの、ここの乙の青海豚あおいるかってなんですか？」

「あ、えっとね、これは僕たちのチーム名。かつこいいでしょ？ 情報収集とかをするのに組織で動いているんだ」

「なるほど。ありがとうございます」

違反した場合は損害賠償金だけに留まらないみたいで、最悪の場合は身柄を拘束されるらしい。しかし私にとつては何の問題もなさそうである。なぜなら、ここで得た情報はそもそも誰にも開示しないつもりだからだ。

私は受け取った契約書に自分の黒ボールペンで名前を書き始めた。契約書を見てみると今の自分の存在を肯定していいのか不安になる。自分がコピー体と知ってからは梶田遥香を名乗っていいのか疑問に思ってしまう

し、今日が何月何日も分からずに生きていることは、実は異常なことなのではないかと思う。私は左腕の服を捲って日付を確認しようとしたが、珍しく時計をつけ忘れていた。

「あれ、私いつ時計外したんだっけ」

お父さんから貰ったあの腕時計は自分の命より大切にしていたと言っても過言ではないほどの愛用腕時計だっ

たので、失くしたのではないかと一瞬不安になった。私は仕方なくスマホを取り出して日付を確認することにした。

「ん？ 由依？」

そこには何やら物騒な件名のメールが一件あって、日付を見るのも忘れてメールを開いた。何があつたのだろう。

To: 遥香 From: 由依

件名: 大至急、逃げて。

本文: 今遥香の家に来てて、二人の遥香に事情は全部聞いたんだけど、

もし今、青海豚団って組織の人に会ってるなら、すぐ逃げて戻ってきて。

分裂については私の専門分野だからなんでも説明できるわ。

手遅れにならないうちに。

それから、絶対に自分が分裂していることと名前と住所は伝えないで。

折り返し待ってます。

契約書にフルネームを書いてしまったことを後悔した。スマホを呑気に見ている川越を目の前にして私の膝が震えだした。

（あ、青海豚……）

さっきまで私が眺めていた「騙されている人間たち」同様、私も騙された側なんだ、と思うとなんだか一瞬にして恐ろしくなって、とにかく気付かれないように遠ざかることを考えた。

「川越さん、何飲んでらっしゃるんですか？」

「ルアックコーヒーよ」

聞いたこともないコーヒーだった。

「美味しそうですね。私も喉が渴いたので同じの、買ってきます」

そう言ってわざとウィンドブレーカーのポケットに財布をしまったうえで椅子に掛けると、私は平然を装って階段を上り、頃合いを見てまた席に戻った。

「財布忘れちゃいました。あ、あつたあつた」

私はウィンドブレーカーを席にかけたまま再度同じように階段を上って店を出た。

「これで暫くは大丈夫だろう」

私は西池袋駅まで走りながら由依に折り返しのメールを送り、マナーモードを解除した。

To: 由依 From: 遥香

件名: もうすぐ西池袋駅。

本文: ごめん、名前は教えちゃった。

今カフェから出て西池袋に向かっている。

多分追って来てはいないから、家さえバレなければ大丈夫。

送信ボタンを押して私は西池袋駅構内に入った。折り返しのメールにすぐ気づけるようにマナーモードを解除して、スマホをジーンズのポケットにしまいこんだ。まだまだ現役の時の感覚が残っていたのか私の息は全く切れておらず、このまま家まで走ろうかと思ったその時、スマホがパカアンという音とともに一件のメールを受信した。

To: 遥香 From: 由依

件名: 家に来ないで

本文: 青海豚団は政府の機関だから本気になれば家の特定くらい簡単にしてくれるはず

だから家には戻ってこないで

西池袋駅で合流しましょ

句点の無いメールから、由依はそうとう慌てて返信をしたのだろうとその姿が目に見えた。

「由依、迷惑かけてごめんっ」

了解、と言返信しようとしたその時、私の目は大通りの反対側に嫌なものを捉えてしまったので、一先ず駅に隣接する大型百貨店に急いで潜り込んでからスマホを取り出した。

To: 由依 From: 遥香

件名: やばい

本文: さっきカフェで会った人っぽい人がタクシーで駅前まで来た

逃げたのバレたかも

とりあえず百貨店の六階に行く

恐怖で頭のでっぺんまで鳥肌がって、髪の毛の質がワントーンさらさらになったような感覚に陥った。それにしても駆けつけるのが早すぎる。それにタクシーから降りてきたのは川越一人だけではなかった。カフェでパソコンを触っていた男が二人、川越の横にいたのだ。二人とも帽子を深く被っていて顔はよく見えていなかったけれど、シルエットのに全員男だった。私は婦人服エリアの試着室の中で息を潜めていれば見つからないだろうと踏んでエスカレーターを駆け上がった。

「こんにちは、わわ、これイイ服ですね、試着室借りますね」

私はそこに偶々あったシャツとパンツを適当に驚掴み、そこに偶々いた店員さんに早口で声をかけて試着室の中に飛び込んだ。流石に少し息が切れ始めていてスマホを見つめながら試着室の中に座り込み、カーテンの隙間から外を覗いていたのだが、青海豚のうちの一人がこのフロアをうろついているのが見えた。

（なんで、なんで、なんで、なんで……）

あまりにも追いかけてくるスピードが速すぎて簡単に見つかってしまうのではないか、捕まってしまうのでは

ないかという不安と恐怖で背中と鳩尾が一気に冷えた。由依は青海豚と繋がっているのだろうか。もし由依が青海豚のメンバーだったらと思うと、恐ろしさから死んでしまいそうである。でも、だとしたら逃げろなんていうメールは送ってこないはずである。鬼のような敵に見つかからないように身を縮めて息を殺していると、私の耳元でパカアンと立派でうるさいメールの通知音が鳴った。緊張しているからか試着室が狭いからか、その甲高い通知音はいつもの数倍の音量だった。

To: 遥香 From: 由依

件名: 了解

本文: 了解

(うわ、了解だけだったら送ってこないでよ)

青海豚の男は一瞬こっちの方面に顔を向けたが、誰もいないことを雑に確認すると、幸運なことに私から遠ざかっていった。由依はメールの通知音で鬼に居場所を伝えようとしてもしているのだろうか。私はスマホをマナーモードに切り替えなおして由依を試すメールを送信した。

To: 由依 From: 遥香

件名: 十二階に移動

本文: 十二階に移動した

なんか私の居場所バレてるみたい

実際はまだ六階の試着室にいる。これで青海豚が十二階に行けば恐らく由依と青海豚は仲間同士であろう。由依が私の味方であろうと敵であろうと、今自分が助かれれば正直どちらでもよかったのだが、送られてきたメールを見て一先ず由依は私の味方だろうと判断した。今は走っているわけでもないが心拍数がどんどんどんどん上がっていくことを実感している。若干息が切れかかっている。私の体が本能的に怯えているのだろう。

To: 遥香 From: 由依

件名: Re: 十二階に移動

本文: 靴裏とかウインブレとか靴とかにGPSつけられてない？

私は立ち上がって、試着室の鏡を使いながら体をくねらせて自分の全身を見渡した。

「これって」

私のジーンズのお尻の部分には薄緑色のガムがくつついていて、その中には発信機が仕込まれていた。恐らくカフェの席に仕掛けられていたものだろう。気づかずに座った私はまんまと自分のお尻にGPSをくつつけてしまっていたのだ。

「くそっ」

売り物だと知りつつも私は試着室の中に持ち込んだ臍脂色のズボンに履き替えた。

「試着室を試着室として使うとは……」

私はカーテンを開けてそのまま店を飛び出した。店員にはすぐに気づかれてしまって万引きだと大声で叫ばれてしまったのだが、朝十一時のこのフロアはスタッフ数が少ない。これは不幸中の幸いだったが、店員の叫びを聞いてフロアの奥から青海豚の男が顔を出して走ってきてしまった。不幸中の不幸である。

「まずい」

その男と目が合ってしまったのだ。私はそのまま従業員用出入口に身を投げるように突っ込んで百貨店の裏口

に回り込んだ。品出し準備をしているおばさんにぶつかりかけるも私は細くて暗くて埃っぽい一本道を一か八かで駆け抜けた。

「分岐路がない。このままだと捕まっちゃう」

障害物が多すぎるこの狭い道ではまともに逃げられないと悟って、私は一本道の途中にあったトイレの一番奥の個室に逃げ込み息を潜めた。もう発信機はついていない。しかし上手くいけばこのままやり過ごせるかもしれないという考え方は甘かったかもしれない。足音が聞こえるのだ。誰かがこちらに向かってきている。その足音がトイレの前でピタッと止むと、女子トイレの入り口の硬い扉が思いつきり蹴飛ばされる音がした。その扉が壁にぶつかった音はトイレ全体に響いていて、私の精神状態は限界に達していた。こんな乱暴なことがでさるの間違いなく青海豚だろう。百貨店勤務のパートさんも、由依も、あと二人の遥香にもこんなことはできない。そいつはトイレの個室の扉を手前から一つ一つ蹴り飛ばしているようで私が見つかるのも時間の問題かもしれない。個室の数は多分四つ。三つ目の扉がけ破られる音がした。そして、今、四つ目の個室の扉が勢いよく蹴破られた。

「ええええい」

男性のかなり声が聞こえてきた。女子トイレから男性の声がするこの状況を考えるに、やはり青海豚の人だろ

う。男子トイレに潜り込んだ私は九死に一生を得た。その男性が男子トイレに入ってくるまでは。私は鍵をかけてトイレの蓋の上に座っていたのだが、ふと上を見上げると口だけがにんまりと笑っているあの男の顔があった。川越だ。

「何、してるのかな？」

二の逃走





川越正満

・ 青海豚（防衛省直轄の機関）

分裂現象について情報をもつ人間。

遥香（二の遥香）に逃げられて跡を追いかける。

二の遥香

・ 榊田遥香 ・ 元彼の渚は一個上の銀行員
迂闊にも赤の他人である藤沢智弘に自身が分裂人間であることを話してしまい、青海豚のメンバーに延々と追い回されることになる。



一の遥香

長崎由依

四の遥香

二の遥香が知らない男に分裂細胞の話をしているかもしれないと聞き、由依は「青海豚（組織名）」ではないかと危機感を持つ。何とか彼女と連絡を取ることができ、三人は遠隔でアドバイスを。由依の指示で変装をして合流を図ろうとするのだが
……何だこの服は。

第六話 一の希望

由依のスマホが鳴った。

To: 由依 From: 遥香

件名: 十二階に移動

本文: 十二階に移動した

なんか私の居場所バレてるみたい

「由依、メール、なんて？」

「えっと、十二階に移動したって。居場所がバレてるって言ってるんだけど」

「なんでだろう、スマホの位置情報は盗み見れないはずだし。GPS取り付けられたとか？」

「そうかな。言ってみるね」

私たちは非常階段を使って息を切らせながらも十二階に駆け付けた。

「どこだろう」

百貨店十二階はレストランフロアで、一本の大きな通路を挟むようにお食事屋さんが並んでいる。

「遥香、いないね」

「合流するにできないか」

「とりあえず、私たちもどこかに身を隠さない？ 二人とも一応顔は遥香だし。見つかったらやばいじゃん？」

「そうだね。じゃあそのもつ鍋の店とかでいい？」

いつもなら賛成しそうな食いしん坊の遥香が冷静になって提案してきた。

「いや、ここはダメだ。一つ下の階に降りよう？」

「あれもつ鍋嫌いだっただ？」

「いや、もつ鍋は好きなんだけど、そうじゃないんだ。私たち、今追われてる遥香とメールしてるよね？ もしも。考えたくはないけれど、もしも遥香が捕まったら、必ず持ち物を調べられると思わない？ もちろん彼女が捕まらないのが一番だけど、捕まってしまったときのことを考えるとこの階にいるのは危ないと思うの」

「なるほど」

「けど私たちにも作戦会議の時間が必要でしょ。このあと家に帰るわけにもいかないし」

「うん」

「ここの百貨店はたしか十一階もレストランフロアだから、とりあえずそこに逃げ込もうよ」

「一理あるね」

彼女の提案で私たちは十一階の個室居酒屋に忍び込んだ。由依が店内の様子を下見してくれて、怪しい人がいないことを確認してから全員で席に着いた。

「ここならとりあえず、ガヤガヤしてるし暫くは問題ないかな」

「そうね。由依、上座に座ってよ。その方が私たちも店員から顔が見られにくくなるし」

「分かったわ」

席が決まると私はフードを脱いだ。

「しっかしあんたたち、ほんとケバケバね」

「由依がやったんでしょう？」

私とワンモア遥香はそれぞれ不審に思われないように由依から変装メイクをしてもらったのだが、その顔がなんとも笑えるのだ。

「これ、逆に目立つでしょ」

「そう？ 割と傑作だと思ったんだけどな。地雷メイクつばくて可愛くない？」

由依は他人にメイクをしたことがあるのだろうか。ところどころぼやけて汚くなっている箇所があり、どちらかというとピエロやビートルジュースの類に近い。地雷メイクというより、もう顔が地雷である。服装も昔ハロウィンパーティーで着たコスチュームで私は『オーリーを探せ』の赤と白の縞々のシャツだった。こんなオーリーは見つけられない方が異常である。相方遙香はというとフレンチタイプのメイド服だった。由依の酷いメイクと併せて見ると、コンセプトカフェの店員のようだった。いずれにせよ客観的に見れば目立っていると
は思うが、私がメイド服を着る羽目にならなくて良かったと心から安心もしている。経緯を話せば由依が私の部屋から『遥香らしくない服』を引っ張り出してきて、ランダムで振り分けただけのことなのだが、そんな由依はというと極普通の私服を着ている。私が由依の立場だったらこんな二人を連れて外にいること自体が恥ずかしいと思うが、由依は

「死ぬよりましでしょ？」

と言って面白半分で私たちを連れだしたのだ。死んだほうがましである。私たちは取り合えず昼の居酒屋ランチメニューから焼き鳥の盛り合わせと烏龍茶を人数分頼んで話を進めた。

「由依、返信来た？」

「いや、それが来ないんだ」

「来ない？ それって捕まったってこと？」

「それがギリギリの状況で返信ができないかのどっちかだね」

「じゃあメールの催促はしない方がよさそうだね」

「菌痒いけどね」

「それで、この後どうしよう。アイツと合流できたとしてもできなかったとしても、私の部屋に戻るのはリスクが大きいよね」

「そうだね。必ず私の部屋まで追ってくるよね。ホテル取る？」

「ホテルか。なしじゃないね。由依は何かアイデアある？」

「うーん、例えばだけど私の研究室、来る？」

「研究室？」

「うん。外に持ち出しはできないけど分裂細胞に関する研究資料もあるし、病院としてもセキュリティはばっちりだから二人がよければ案内するけど。どうする？」

「めっちゃアリだね」

「そうしよう。由依の活躍する現場も生で見えたかったし一石二鳥だね」

「そんなかつこいいもんでもないよ？ 凄く普通。大学みたいな感じ。てか、大学なんだよね」

由依は私たちに苦笑いを見せた。

「ね、もしもう一人の遥香が捕まったとして、奪還するにしても多分一旦計画を練らなきゃだね」

「そうだね。彼女からの折り返し連絡はいつまで待つ？ 三十分とか？」

「いや十分でいいと思う。三十分後に連絡があるとしたら遥香は既に場所を変えてると思うんだ」

「一理あるね。私ならそうするかも」

「じゃあここで長居するのはあんまり意味が無いってことだよね」

「そうね」

「研究室の場所って西京学院大学病院に隣接されてるんだっけ？」

「うん。隣接されてるっていうか、あれだね、病院の敷地の中に診察棟と研究棟があるって感じかな」

西池袋の近くに住んでいると言いつつも、どこにそんな大きな大学病院があるのかは知らなかった。

「ここから何分くらい？」

「うーん、タクシー拾って二十分もあれば着くかな」

「意外と近いね。タクシーいくらかかるんだろう。今そんなに手持ちないんだけど」

「五千円もしないと思うよ。ま、経費で落とすからゼロでいいわ」

「さすが、研究室はリッチだね」

「いやいや、それが思ってるよりカツカツな世界なのよ。研究も成果を出さなきゃ支援金は打ち切られちゃうし、民間の助成金も少額だからねえ。それに私たちは例の研究を大々的に公表できないから尚更大変なのよね」

話している由依の口元は若干悲しげに見えた。

「そっかあ。表向きではどんな研究ってことになってるの？」

「簡単に言えば再生医療かな。分裂人間の脾臓から検出した細胞に外から弱酸性の刺激を惹起させることで万能幹細胞を作ろうとしたんだ」

「んーと、もうちょつと簡単に言って？」

「つまり分裂細胞の修復能力を応用させた『i^スn^デ A^ッs^ッ S^ッt^ッe^ッm^ッ細胞』っていうのを作ったんだ。けどね、肝心の分裂細胞のところを秘し隠しにしたら再現性がないって言われちゃって。世間には認められなかったんだ」

「あ、そのニュースはテレビで聞いたことがあるかも。『in A's STEP細胞があります！』ってやつだね。

最先端すぎて伝わらないんだね」

「そうなの」

「私に何か手伝えることがあったら言ってね」

「ありがとう。一緒に謎を解明しながら平和な生き方を見つけようね」

私たちはこの姿のまま店を出てタクシーに乗り込み、由依の拠点となる大学病院に向かった。西京学院大学病院は大きく八つの建物に分かれている。入院棟、中央診療棟、外来診療棟、管理研究棟、病態研究棟、臨床研究棟、臨牀試験棟、特別研究棟である。私たちの乗っていたタクシーは中央診療棟の狭い駐車場に停まった。

この建物は毎日何十、何百人もの患者が診察のために訪れる場所であり、唯一誰でも出入りができるスペースである。私たちはそこから数分歩き、特別研究棟に立ち入った。由依が自分のEカードを壁にかざすと扉が音を立てずに開き、その先には五十歳くらいのおじさんと少し年上くらいのお姉さんが立っていた。近づく私たちとおじさんたちの間には大きな透明の壁があつて、おじさんはマイク越しに話しかけてきた。

「やあやあこんにちは。由依ちゃんから話は聞いているよ。遥香ちゃんだね。医学部教授の對馬です」

「はじめまして」

私はやや人見知りなのだが、ワタシに会ったときより緊張はしなかった。

「まあここに居る限りは君の身にどんなことが起ころうとも最後まで守りきつてみせるから、リラックスして入ってきてね」

「ありがとうございます」

「そしてこの子はアシスタントの理乃ちゃん」

「名取理乃なとりです。お願いします」

私たちはぺこりと会釈だけした。

「早速中に入ってもらいたいところなんだけど、内部のクリーンな環境を保つためにその浴槽式滅菌処理室に入ってほしいんだ」

透明な壁で部屋が仕切られているのはそういう理由だったのか。私は相槌をうちながら對馬教授の話と名取さんの滅菌処理室に関する説明を聞き続けた。

「物理的な洗浄、電離分解を使った病原体の殺滅、滅菌、最後に乾燥まで含めて全自動でやってくれるから、君たちは服を脱いで立っているだけでいいよ。部屋を出たところに簡単な着替えも置いてあるから、最後はそれに着替えてもらってもいい？」

「分かりました」

大きな大学病院などだけあつて除菌対策やその設備にはしつかりとお金がかけていた。外から入ってきた由依を含む私たち三人は横並びで滅菌処理室に入るとすぐに部屋はロックされて、直後きめ細かいシャワーの噴射が始まった。地雷風メイクも顔からどんどん剥がれていつて黒い液体が床に垂れ流れ出た。隣を見ると同じようにメイクの剥がれたミディウムヘアのワタシがいて、目を瞑った彼女を見ていると素の自分に惚れたような感覚がした。全ての行程が終わると用意されていたパジャマのような青いシャツと白いパンツという患者衣に着替えて滅菌処理室を出た。由依は久しぶりの滅菌処理だったようで少しばかりテンションが高かった。

「改めまして、こんにちは。医学部教授の對馬です」

「アシスタントの名取です」

「来てもらったばかりなのに申し訳ない、僕はちょっとこの後次の会議が入ってるので一旦ここで失礼させてもらいますね。理乃ちゃん、あとはよろしく」

「了解です。遥香さん、この度は大変な騒動でしたね」

「恐れ入ります」

「きつと由依からいろいろ聞いているとは思いますが、ざっとまず施設について説明しておきますね。こ

の研究棟は特殊遺伝子専攻用に建てられた施設なんです。病院のメインエントランスから敷地に入って入院棟の右奥に建つこの施設は第二研究棟と連結してE型になっている点が特徴です。ここに来るための入口はここ第一棟の正門か、さっき入ってきた駐車場口、それから第二棟の正面の門の三つだけ。どこから入っても滅菌処理室に入らなければそこから先の施設には入れないようになっていて、一度外に出るたびに必ずその工程を踏まないといけないから外出するときは気を付けてくださいね。第一棟も第二棟も四階建てになっていてそれぞれに役割があるんです」

名取さんは私には直接的に関係のない情報もマニュアルのように話し始めた。

「第二棟は基本行くことはないんですけど制御室が一階、機材保管室が二階と三階、資料保管室は四階だったかな。一方で第一棟はもつとラフな施設で会議室や論文執筆部屋がメインになっています。どれもIDカードがないと入れないようなところばかりなので、何かあったら由依か私とかに声をかけてくださいね。まあ研究って言っても人体実験とかは倫理的にアウトなのでインタビューくらいしかできてないんですけど、それでもこのデータは貴重なものばかりなので管理体制が厳しくなってるんです。あ、はいこれ、門外不出ですけどよかったです。紙一枚でかなり寂しい資料ですけど私たちの持っているデータの全てです」

「あ、ありがとうございます」

そこには箇条書きで分裂細胞に纏わる情報がいくつか書き込まれてあつて、私は素直に頭を下げた。

・分裂細胞を持つ個体が死を迎えた時、その十四秒後に本体はその場で命を吹き返し、同時にその個体の分裂体(クローン)が生まれる。

・クローンが死んだ場合もまた、右と同様の現象が起きる。

・コピー元となる個体が最後に横になって寝た場所でクローンは生まれる。

・個体が怪我を負って死ぬ場合、その個体が息途絶えるまでその痛みを感じ続ける。

・個体の死因となった傷は本体の復活までに可能な限り修復される。

・年齢や個体数が増えるほど傷は回復しにくくなる。

・本体とクローンは体力を共有する。

・一人が一人分の体力を消耗しきると、別個体分の体力を使うことになる。

・個体ごとの基礎体力は個体数が増えても変わらない。

・系譜上直系の個体の「死ぬ前までの記憶」は以降生み出されるコピー先に残存する。

・復活及びクローン生成以降のそれぞれの感情や思考、痛みなどは共有されない。

・分裂細胞を持つ個体は光を好まない。

・分裂細胞を持つ個体は水質に敏感である。

「凄いですね。こんな詳しく。あ、水質って、だからか」

「どうしたの？」

「私もともと水泳部に入りたかったんだけどね、仮入部時期にプールの水が原因で肌荒れが続いて、それで急遽陸上部に入ることにしたんだ」

「そうだったんだ。そういえば水泳の授業も全部休んでたっけ」

「そうそう。よく覚えてたね」

「だって私、遥香が入ってるところ見たことなかったから」

「水質がダメなのか塩素がダメなのか分からなかったんだけど、まさかこんなところに繋がってたとは」

「でも水質と分裂ってどう関係があるんだろうね」

「ほんとだね。調べようにも肌荒れを起こさせるわけにはいかないし、これ以上は追及しにくいんだよね」

「そうだよね」

私は紙一枚分の資料を見て少し失望した。その不服そうな顔を見て由依も心配そうに声をかけてくれた。

「どうした？」

「いや、なんていうか、私ってどうなるんだろうって思っちゃって。クローンの生成については書いてあるのにクローンの消滅について書いてないってことは、他の分裂人間もそのまま生き続けてるってことだよな」

これは私が本体であるが故の発想なのかもしれない。隣を見るとクローンである遥香が何とも言えない表情を浮かべている。私は由依に話を続けた。

「どういう生き方が正解なんだろう。私にはもう分からないや。元はと言えば全部ひとりの私なのに、それが分裂して生きてしまったことで少なからずそれぞれの遥香にアイデンティティとか独占的な思い出が生まれちゃったと思うんだよね。もう私だけの人生じゃないんだなって。そもそも死ぬるのかな。死ねなかったら百歳になっても二百歳になっても生き続けないといけないよね。もう体が動かなくなると思うんだけど」

「年を取って分裂細胞自体が劣化すれば増殖もできなくなるかもしれないね」

「それが事実上の死なのかな。じゃあ私たちはいつ死ぬか、死なないのかも分からないまま生きていかないけないの？」

「でもそれは皆そうじゃない？ 人間は神様じゃないんだから、寿命を知らずながら生きることなんかできないじゃない」

「そうじゃなくて。この不安はそんな綺麗事で済まされる話じゃないんだよ？」

「ごめん、そうだよね」

こればかりは由依も自分の発言が軽率だったと頭を下げた。

「もし仮に寿命があるとしてさ、本体でもクローンでも、誰か一人が人生をまっとうしたら、他の全員も消滅できるのかな」

するとすかさずクロンのワタシが喋りだしたのだが、その発言には生きることに対する執着心が垣間見えた。

「どうだろう。推測でしか喋れないから確かなことは言えないけど、多分それはない気がするな。だってさ、西学医学部の特殊遺伝子専攻の研究では人間が生存率を上げるためにこの分裂細胞が生まれたって言ってるんでしょ？ もし一人消えて皆が消えるようだったら死亡率っていうか、致死率も上げてることにならない？ それじゃあむしろ非効率の過ぎるよ。だったら分裂した後の人生は各個体に一任されてある方が自然だと思わない？」

「いや、アメーバみたいに有性生殖しない種の中には分裂を繰り返しても老化しない生き物だっているし、増えるだけで生存確率は上がってるとも言えなくはないからね」

私がそう返すと彼女はあからさまに機嫌が悪くなった。こっちのハルカとこんな雰囲気になるのは初めてであ

る。私には一切目を合わさずむくれた表情のまま彼女は由依の方を向いてしまった。最初に現れたアイツとは違つてずっと優しくかった彼女とはこれからも仲良くできると思っていたけれど、他人に生き方を決められることが嫌いなのは自分がよく分かっていたことだった。ついさっきまで一緒に餓死を耐え、未来を考え、もう一人のワタシを助けようと時にふざけたメイクもした彼女だったのに、この話を境に憎悪し合う猿と犬のように冷やかな仲になつてしまった。二人の間の緊張感が高まつて由依が仲裁を始める始末となつた。私は手渡された資料にもう一度目をやつて、ふとあることに気が付いた。

「系譜上直系の個体の死ぬ前までの記憶は以降生み出されるコピー先に残存する」

クローンなだけあつて彼女と私は共通点だけである。顔も体も、口癖も同じ。記憶も残存するのになぜこうも考え方が割れるのだろうか。アイツのときもそうだった。双方に私がワタシを受け入れられないだけなのだろうか。いや、もっと大事な根本的な部分で何かが違う気がする。

「ねえ、私自分の家には戻れないんだよね？ どこで過ごせばいいの？」

彼女は由依に向かつてぶつきら棒に口を開いたのだが、一人称は私たちではなく私だった。

「いいです」

今までずっと黙つて見ていた名取さんが声をかけた。

「ここ？　ですか？」

「はい。この部屋を出て奥まで行ったらベッド付きの部屋が一部屋あるので、そこで寝泊まりしてもらおうと思ってます」

「えっと、部屋は一部屋ですか」

「ああ、そんなこと心配してたんですね。一応ベッドは四つありますが、ただ入院棟の四人部屋とレイアウトは殆ど変わらないので仕切りはカーテンになってます」

「そうですか」

分裂人間同士にエスパーの力はないが、今だけははっきりと彼女の気持ちを読める。私と同じ空間にはいたくないと、そう顔に書いてある。

「とりあえず移動してみる？　ここですっと立ちっぱなしってのもなんだしさ」

何とかこの喋りにくい嫌な空気を変えようと由依が提案してくれ、私たち一行はその部屋に移動することになった。大学と病院を足して二で割ったような霧囲気の廊下を四人で歩いて病室のような宿泊部屋に入るとそこには無機質なベッドが四台、向き合うように並んでいた。

「本当に病院ですね」

窓に近づいて外を眺めると同じ色の壁の建物が二、三棟建っていて周りの駐車場には沢山の車とバイクが停まっていた。部屋に入って一息ついていると由依の持っていた院内の端末がピリリと神経質な鳴り方をし、彼女はぐめんと一言添えて申し訳なさそうに部屋を退室した。由依が外に出るとそこには初対面の名取さんと溝のあるもう一人の私の三人にだけが残されるようになってしまい、余計に話すことが無くなってしまった。この緊張感の名取さんにも伝わっているだろう。シーンとしすぎていて壁に掛けてある額縁の絵が今にも落ちてきそうである。

「あの、ここって食事していいんですか？」

「ええ。大丈夫ですよ」

「昼も焼き鳥数本だったのでお腹が空いてて」

彼女は名取さんと二人で話始めたので、私は一番近くにあったベッドに腰を下ろし、心の中で今夜は地獄になるかと呟いた。彼女との関係を元に戻したいと思うも、こじれた原因を考えるとそれは不可能にも感じてしまうのだ。お互いが生きたいと思っていることが判ってしまったからである。数週間前までは死にたくて仕方がなかった自分とその分裂体がこんな感情に陥っていることはなんだか不思議である。死を経験したが故の思想なのか、本当の死を知らないが故の思想なのか、比較対象となる相手が存在してしまったことによる感情なの

か、私にもその感情の出どころは分からなかった。

「では取ってきますね」

名取さんが何かを取ってくると部屋をでて、とうとう私と彼女の二人きりになってしまった。恐らく名取さんは何か食べるものでも探しに行ったのだろう。私はがむしやらに声をかけて関係修復を図ろうとした。

「ねえ」

「何？」

ハルカはまだ不機嫌なふりを貫いている。

「なんか、ごめん」

「何が？」

「その、私だけ生きようとして」

彼女は暫く口を開かなかったが、置時計の秒針が一周回ったくらいのタイミングで静かに語りだした。

「そんなことじゃないよ」

「え？」

「私は確かにクローンかもしれないけど、私は私として生きたかった。だって記憶の中では確かに榊田遥香な

んだもん。記憶があるから私はクローンだって自覚しているけれど、心はもう限界なんだよ」

私は声をかけなかった。

「真実が明らかになっていけばいくほど、私は存在を否定された気分になるの。それを本体であるあなたが軽視してることに腹が立つの」

私はそこで初めて彼女の気持ちを理解した。私が初めて自分の分裂体に出会ったとき、存在を否定された気分になって辛かった。だから私はソイツを刺し殺そうとしてしまった。私の中のちよつとした嫉妬心がそうさせてしまったのだろう。一度体験したことのある立場なのに自分が本体であるという少し優位な立場に立ってしまったことで他の人の感情なんて考えられなくなっていたのだ。いや、本体であることを優位と思ってしまうこの時点で私はまだ何も変わっていないのかもしれない。

「ごめん。真実が明らかになればなるほど私たちの生き方が見つかるかなって思って、必死だったんだ」

「それは分かるけど。私が仮に本体の中に回帰したとしても、それは生きているとは思えないのよね」
彼女が伏せ目がちで呟くと、私の返事を待たず部屋の重たい扉が勢いよく音を立てて閉まった。

「何？」

さつきとは違う静寂の中、ジジジジと低周波音とともに鍵が外側から閉まる音がした。私は不思議に思っ

扉に近づくも内側から開けることはできず、扉を叩いて助けを呼ぶことになった。ただの病室だと思っていたが、扉だけは頑丈だった。

「由依？ 由依？ 名、名取さーん」

一、二分経つても誰も来ず、裏切られてしまったという嫌な想像しかできなくなっていた。

「はめられたか」

想像したくはなかったけれど、その想像が的中してしまつてどうすることもできなくなつてしまった。

「いやいやいや、ごめんねごめんね。乱暴なことをする気はないからさ、ちよいと狭い病室だけだ目に
見てね」

会議に行つたはずの對馬教授が戻つてきたのだ。彼は扉の隙間から中を覗いて話しかけてきた。

「悪く思わないでね。この監禁は君たちを、いや、日本を守るために仕方がなくやつてることなんだ。分裂人間が誰かの手に渡つて悪用されないためにも、君たちを社会から匿う必要があるんだ。ご飯とかは一日三回ちやんとあげるからさ。それではまた」

對馬教授は一方的に扉の前から姿を消し、私たちは部屋の中で立ち尽くし顔を見合わせた。私は、私たちは、誰を信じて生きればよいのだろう。

「ど、うしよう」

「どうすることもできないね」

「いつまでここに監禁されることになるんだろう」

「死ぬまでじゃない？」

「死ねないのに？」

「そうだね」

普段なら笑えそうな話も余裕を失った私たちは一切笑えなくなっていた。

「何もできずに一生ここで過ごすって、生きてるって言えるのかな」

「いいや、飛び降りする前の生活よりつまらないね。こんな人生だったら死んだほうがましよ」

「死ねないけどね」

ブラックジョークが面白みを失っているほど、私たち二人にとっては精神的にも危機的な状態なのである。

「扉、開かないかな」

「さすがに無理でしょ。窓も開けられるタイプの窓じゃないし、換気口もない」

「最初っから閉じ込める気だったのかな」

「そうかもね」

危機からの脱出という同じ目標を前にして私たちの距離は少しだけ縮まった気がした。

「由依も、知っててここに連れてきたのかな」

「どうだろうね」

「もう、だめか」

「もしこの部屋から出れたら、何をしたい？」

「うーん、何もしたくない。ただ欲に従うまま自由に生きたいかな」

「怠惰な人間だな」

「もう疲れちゃったんだ」

「でもそれが生きるって言う意味を成すなら、一つだけ生きれる道があるよ」

「何？」

「死ね」

「は？」

「ここで死ねば屋外に遥香を生成できる。その自分に自由な生き方をさせてあげればいい。それを自分と認め

られるからね」

私は少し考え込んだ。作り出したワタシを私といえるのかが分からなかったし、生み出したワタシに対する責任を持てなかった。私は自分の人生の中で、生まれたくて生まれてきたわけじゃないと考えてしまったことが何度もあった。それはいつも苦痛と向き合うときだったが、明らかに苦痛が多い今の私の人生において意図的に新たな遥香を作り出すことは罪深いとも思った。

「そんなことしていいのかな」

「もしかしたらそのクローンの中に回帰できるかもしれない」

「それってクローンを利用してること？」

「じゃあ考え方を変えればいい」

「というത്？」

「新たなクローンに助けに来てもらえばいい」

「そんなことできるかな？」

「不可能ではないかな。資料、ちゃんと読んだでしょ？ 記憶は残存するんだ。今の状況と考えていること、これからしてほしいことを頭に入れてから死ねばいい」

それは相当な覚悟を必要とする行動だった。

「ねえ、アイツは助けに来てくれないよね」

「アイツって？」

「私たちが刺したアイツ」

「私たちって、刺したのはあなたね。彼女は来てくれないよ。記憶がシェアされていないからね。私たちがアイツの状況を分らないのと同じように、私たちが捕まってることすらきつと認知してないと思うよ」

「そうだよね」

「ここで寝てしまう前に踏み切りをつけて。じゃないと一生外に出れなくなるから」

「ねえ、これ、私が死ななきゃいけないの？　あなたじゃダメなの？」

「えっ」

「だって別にあなたも最後に寝た場所私の家だし、そっちが死んでも問題ないんじゃない」

「それはそうだけど、何ていうかクローンが死ぬより本体が死んだほうが整合性は取れそうじゃん」

「どういうことよ」

「だって思い出してよ。本体のあなたは既にクローンを二人生み出してるんだよ。でもあなたが刺殺したアイ

ツはクローンを増やせてないじゃない。分裂した個体のクローン生成確率は低いかもしれない」

思い返せばそうであつた。確かに私はアイツを刺したが、アイツの口から一言も更なる分裂体の話を聞いていなかった。

「そうそれはそうだけど、私だつてもう一匹クローンを作れる保証はないわ」

「その確率は私にとつても同じよ。結局死ぬのが怖いんですよ？」

私はワタシに核心を突かれ、いつそのこと開き直るしかなかった。

「そ、そうだよ。死ぬのは怖いよ。どうせ死ねないと思つていても死にたくないよ。私も私のために生きたいんだから」

そうハツキリと口にしたとき、目の前の彼女に異変が起きた。

「ね、ねえ、足！」

彼女の足の色がどんどん抜けていつて、存在の気配が消えかけようとしていた。

「なにこれ！ 私、消えるの？ ど、どど、どうしよう」

私は何とも言えない気分になつてしまった。何がトリガーになつたかは分からないけれど、私の分裂体が消滅するかもしれないということに喜びすらも感じた。分裂体の消滅は時間で決まっているのだろうか。私は彼女

に無心で話しかけた。

「今すぐ死ね！　じゃなきゃこのまま消滅するぞ！」

「バカか、消滅しかけてるやつが分裂しても仕方ないだろ。お前が逝け」

その胸間声に圧倒されて私は自分の生死に執着が無くなってしまった。彼女の肌の色は元の色に戻り異変は収まったようだったが、私は急いで一区画のカーテンを閉め、そのなかで自殺を図った。気がつけば目が覚めていて、自分の増殖に成功したのかどうかも分からない。増殖に成功したと考えたほうが心は楽であった。研究棟の一区画に閉じ込められた私たちは、二人して自分たちの人生を会ったこともないワタシに託すしかなかった。

「ねえ、生きてる？」

一の希望





長崎由依

- ・22歳（遥香の中学時代の同期）
- ・西京学院大学医学部 生物学応用生命学科 特殊遺伝子専攻
分裂人間の調査で海外を飛び回っている。百貨店から引き
あげて二人の遥香とともに大学病院の研究施設に戻る。

名取理乃

- ・年齢は不詳、大人びていて年上っぽそう
- ・学歴不詳

医学部の對馬教授に信頼された人間。重要事項を淡々と説明し、院内の案内も担当した。趣味は自動車の運転。



一の遥香

- ・武蔵新陵大学 中退（実際に大学に通った方）
- 分裂人間の謎を解明しようとするあまり、他の遥香の気持ちを考えることができなくなっていた。
- 四の遥香と対立する。

四の遥香

- ・武蔵新陵大学 中退（大学に通った記憶がある方）
- 自分がクロンの遥香であると認識しているが故に、分裂人間の謎の解明が怖かった。解明の結果、この世から消滅してしまうのではないかと感じていた。



第七話 五の記憶

私は独り、西池袋駅のラグジュアリーホテルで目を覚ました。どこからが現実でどこからが夢なのかは分らないが、とてもとても長くて痛い夢を見ていた気がする。暫く外で飲んで遊んでこのホテルに入ったことまでは覚えていたのだが、そこから先の記憶が混乱している。睡眠薬でも盛られたのだろうか。腹立たしい。ふと自分の腕を見ると私は高校の時の制服を身に纏っていて、恥ずかしい気持ちとやるせない気持ちでいっぱいである。

「誰だよ、私にこんな服着せたやつ。ぜってえ許さない……わっ」

見ると腹回りが真っ赤に染まっていて、頭は真っ白になった。

「血？ まさかあいつに？」

このホテルに長居するわけにもいかず、私は一先ず自宅に戻ることにした。

「あれ、お嬢ちゃん、いつのまに。忘れものでも？ わ、すごい血じやの、大変やったやろお」

「え、ええ。大丈夫なので」

ロビーを通ると受付のおじいちゃんに声をかけられたのだが、適当にあしらえばホテルを抜け出ることができた。一歩外に出ると冷たい空気が肌に刺さり、足に纏わりついていて暖かささえも一瞬にして消え去ってしまった。

った。

「こんな寒いのにミニスカとかマジあり得ないし」

そんな文句を口にしながら足早で帰り自分の家の階段を上った。自分の家の扉の前で鍵を取り出すという概念はなく、ドアノブに手をかけ家に入った。

「きったねえ部屋だな」

そのまま自分の定位置に向かうと、人生に対するイライラを抑え込んで毛布の上に寝っ転がった。寝るに寝れずうつ伏せになってスマホを触っていること数十分、玄関付近で物音がした。

「誰だ？」

私は少し怖くなって声で威嚇したのだが、それに対する応答は一切なかった。音を立てないようにそおつと起き上がって恐る恐る玄関に向かうと、そこには一人の女の子がうつ伏せでぐっすりと眠っていた。

「なんだお前、なんでこんなところで寝てんだよ。出ていけ」

キッチン前の床だった。なんだかいつの日かの自分を遠くから眺めているような気分になった。

「おい、起きろって」

そいつの身体をひっくり返すと私の顔が現れた。

「おい、何してんだよ」

恐怖が故に怯んでいる暇もなかった。

「ああ、そういうことか。成功したんだな」

「おい！」

「ん？　なんだよ、うるさいなあ」

「おい説明しろって。なにが『そういうことか』だよ。何がどうなってんだよ」

この感情をどこに持っていけばいいかすらも分からなかったけれど、一旦彼女に対してぶつけることしかできなかった。

「何怒ってるんだって」

「そりや怒るだろうよ。お前は混乱してないのかよ」

「うーん、いろいろよく分からないことは起きたけどさ、それを受け入れないと仕方ないでしょ。もう面倒くさいの」

「あんたどんな神経してんの？」

「もう真相を知ろうとしたって無駄だよ。私は生かされたんだから、私として今を楽に生きればそれでいい」

のさ」

彼女がこの状況で香気に寝っ転がっていることが私は不思議で仕方なかった。

「今自分と全く同じ姿かたちの人間を目の前にしてんだよ？　不思議だなとか怖いとか、そんな感情はないわけ？」

「だってもう見飽きたもん。で、あなたこそ川越に追い掛け回されてよくそんな怒鳴るエネルギーなんか残ってるよね」

彼女の話には私の知らない引っ掛かる内容が多かった。

「ちよつと待って、川越って誰。見飽きたって何？」

「ん？」

「何を知ってるの？」

私からしたらまるで何でも知っている神みたいな存在だった。

「ねえ教えてって、私はどんな経緯でここにいるの？　あなたは何者なの」

「厄介だなあ。あなたは柊田遥香、私は柊田遥香。以上」

「それだけ？　もっとほら、経緯があるでしょ」

「もうしんどいつて。まずはあなたが喋ればいいじゃない。聞いているから。君はどこまで記憶があるのよ」

「記憶、つていつてもほとんどないわ。だから聞いているの」

「あなた、何も知らないの？　じゃあ聞き方を変えるけど、柊田遥香が増殖してることは知ってる？」

「そんな夢は見たことあるけど、まさか本気で言ってる？」

「言ってる。君の見たそれ、多分夢じゃないよ」

「バカじゃないの？」

「バカだと思ふならそれで結構。んじゃおやすみ」

ここでは態度を改めないと自分が不利になることが分かってからは一時的に感情を抑えることにした。

「ごめんごめん、今の無し。ちゃんと聞くから、ね、教えてくださいっ」

彼女はスマホの画面を見ながら私に尋ねてきた。

「増殖した夢、どんな内容だったの？」

「私がここで柊田遥香に刺れる夢だったわ」

「なるほど。そりゃあ何も知らないわけだ」

「ねえ、隠さずに教えてよ。……教えてください。あなたは何者なの？　なんで神のように知り尽くしてるわ

け？ ……ですか？」

「見てきたからよ。私を生んだ榊田遥香が厳しい世界を見てきたから。その記憶が残ってるだけで私は何もしてないの。面倒だし、するつもりもない」

「記憶？」

「そうよ。あなたが夢だと思ってるものは全部、あなたを生んだ前の遥香の記憶なんだと思うわ」

「私を生んだワタシ……。あなたの、その、ご先祖様？ と私のご先祖様は別人なの？」

「先祖って、あなたの産みの遥香はまだ生きてるわ。キリスト教みたいな大規模なもん想像してる？」

「うん」

「もつと歴史は浅くて小っさいの。ここ数週間の話よ。それから私を生んだ遥香とあなたを生んだ遥香は元を辿れば一緒よ」

「その人は生きてるの？」

「死ねないんだ」

全然彼女の言っている意味が分からなかった。

「それが分からないんだよ」

「私たちの身体はいろいろ訳あって死ねない体になってるの」

「いろいろって？」

「それは割愛。あとで調べなさい。いい、それでね、私たちは自分の命が絶たれた時、つまり死んだ時、その十数秒後に命を吹き返すシステムになってるの」

「何その任天堂のゲームみたいなシステム。気持ち悪っ」

「それだけじゃないわ。命を吹き返すのに加えて、もう一人自分と同じ生命体がこの同じ地球上に誕生するのよ。自分が最後に寝た場所だね」

「それが、私とか、あなた？」

あまりにも非現実的で信じられない話だったが、目の前の彼女の存在とそいつの妙に落ち着いた態度を見ると納得せざるを得なかった。

「そう。それで私たち分裂体は一つ前の個体の全ての記憶を引き継ぐようになってるの。だから死んだタイミングで記憶を区切って、自分の身に何が起きたかを整理するといいわ。私からは以上。そんじやおやすみ」
ある程度聞き出したことを聞けたのだが、この後どうやって生きていくかというプランは全く無かった。

「なるほど。ありがとうございます。となると私は三回死んだから……」

そう私が独りで呟いたところ、彼女はふと何かを思い出したかのように勢いよく話に食いついてきた。今までの彼女とは別人のようである。

「三回？ 三回も？」

「多分ね」

「私の記憶と相違があるわ。一回目は？」

「多分自殺」

「ゲーセン帰りにこの部屋から飛び降りたやつ？」

「うん」

「あれな、なんか懐かしいな。いや思い出すと気持ち悪いな、あの感覚。頭から落ちたもんね」

彼女は思い出話に花を咲かせようとしていた。

「あれ、首を先に打たなかった？ いろいろあったから忘れちゃったな」

「仕方ないね。二回目は？」

「二回目は部屋で刺された時かな。でもその辺の記憶もちよつとあいまいかも」

「あー、でもあつてゐるわ。その節は、なんかうちの本体がすみません」

「本体見つけたらどついてやる」

「す、すみません」

「まあ、あなたがやったわけじゃないからいいわ」

「恐縮です。それで、あの、肝心の三回目は？」

それはついさっきのことだった。

「あれが一番怖かったなあ。三回目も刺されたのよ。小さい果物ナイフか何かで」

「ん？ 誰に？ 川越正満？」

「川越？ それは誰か知らないけど、私を刺したのは渚君よ」

「えっ？ 渚君？ 話が飛躍しすぎてるって」

「あなたの話よりは飛躍してないわ」

「そ、そうか。ねえ、私も話したんだから、あなたの話も整理して聞かせてよ」

「分かったわ」

そう言われて私はここ最近の記憶を一つ一つ整理しながら話すことにした。

「あれは忘れもしない数週間前のことよ。あなたのその死んでない先祖にナイフで刺された後、丁度この場所

で目覚めたわ。その時にはもう刺した奴は居なくなつて、えーっと、そう、刺された方の遥香だけが居たわ」

「それで、何も変だと思わなかったのかい？」

「ううん。変だとは思わなかったわ。だって私が二人いるんだもん。私がその人に向かつて『これは夢？』
って聞くと、彼女は『夢だよ』って囁いてきて、一旦部屋から出て行つたんだ」

「出て行つた？」

「うん」

「アイツは何を考えてるんだ」

「君はもっと自由に生きなさい、ってそう言われたわ」

「それで、どうしたの？」

「その人がいなくなつて、そのときは幻覚か何かだと思つて深く追求しようとはしなかったわ。でもその後自分が部屋に一人になるとなんだか寂しくなつて、情欲に身を任せて動いたんだ。働く気分じゃないし、寝る気分でもない。何となく誰かに会いたくて、生きていたいけど生きていたくないような、そんな気分になつたんだ。だから部屋から昔の制服やらパーティードレスやらを引っ張つてきて鞆に詰めて出かけたの」

「どうして？」

「歌舞伎町。そこで何日かホテルを転々としたんだけど、なんだかそういう生活にも飽きちゃって。持ってきた服も臭くなっちゃったし、一回家に帰ろうと思ってホテルを出たんだ。あ！ そうだ、それでだ。全部つながった！ 家に帰ろうとしていつものあの道歩いてたの。分かる？ あの人気の少ない林道？」

「デコ屋敷のあの道？」

「そう」

「そこに来たの？ 渚君」

「うん」

「それで、なんて？」

「何他の男と遊んでんだよって。もう凄い剣幕で、あれは人生で一番怖かったな。『俺を振ってからお前は見向きもしなくなつて、電話も出てくれないよな。お前のじいちゃんが死んで、今は会う気にも縊りを戻す気にもなれないとか言つときながらそんな淫らな恰好で何してんだよ』って。十数センチくらいのナイフを持ってこつちに走ってきたわ。急に足がかたくなつて、動けなくなつて、気づいたらホテルのベッドの上に居たの。だから夢かなつて混乱してたんだ」

「なるほど。そういうことか、おかげでスッキリしたよ。ありがとうね」

「ね、あなたがどうやって生まれたかまで私は聞いてないんだけど」

「そんなの聞いてどうすんの？」

「私もスッキリしたいじゃない」

「君も人間だね。分かったよ」

「本体がどこにいるのかも知りたいわ」

彼女は私に体を向けてやや冷静に話し始めた。

「私を生み出した本体が病院でやばい組織に捕まって、そこから抜け出すために死んでここに来たのよ」

「え？ 抜け出すためって、助けに行かなくていいの？ 理論上だとまだその本体は病院に捕まってるってこ

とでしょう？」

「いやあ、いいよ。私だって好きで生まれてきたわけじゃないし。助ける義務なんてないでしょ。それにあん

なの正面突破できないって」

不可解な現象が訪れるだけでは済まされなかったようだ。半信半疑で聞いていたエスエフのようなおとぎ話だったが、自分が組織に狙われていると聞くと、急に現実には舞い戻ってきたような気がした。

「やばい組織って何？」

「私たちのこの分裂する特性を珍しがって研究したがる組織よ」

「それ、放置してて大丈夫なの？」

「いいんじゃない？」

彼女は全てを諦めたような顔をしていたが、私は本体を見捨てるような彼女の態度に怒りさえ覚えていた。

「ねえ、やばい病院って、まさか西京学院大学病院じゃないよね？」

「西学病院よ」

諦めてよいはずがなかった。

「待ってって、西学はお姉ちゃんが入院してるところじゃん。人質に取られたらどうすんの」

「知らないよ面倒くさい。そんなに助けたいなら君が行けばいいじゃない」

「バカじゃないの？ 私は何も事情を知らないの。具体的に誰がどこでどうなってるのかも知らないの。でも

あなたは全部知ってる。ほぼ全遥香の記憶を持っているのと同然なのよ。あなたが行くしかないじゃない」

彼女に反論する隙を与えずに私は話し続けた。

「それがあなたの生きる理由よ。ねえ、ねえって、あなたさっき本体は死んでも復活するって言ったわよ

ね？」

「それがどうした？」

「私、見てないんだけど」

「見てないって、何を？」

「元彼に実際に刺されたワタシを。刺されたのは家のすぐ前のデコ屋敷のある林道。十数秒後にその場で息を吹き返すなら今ここに戻ってきてないっておかしいよね」

家の近くでサイレンの音がした。

「この音は、パトカー？ 救急車？ どっち？ 下手したらこの家に誰か来るって。そしたら二人ともおしまい」

「この音はピーポーじゃなくてウーウーだから警察車両だな」

「ねえ、とにかく、私がこの家に残って後は全部引き受けるし時間稼ぎもする。だから、あなたは早く姉ちゃんの元に向かって。そのやばい組織って倫理に反する実験をしよる可能性もあるんでしょ？ 私たちはともかく下手したら姉ちゃんが殺されるよ。まずは姉ちゃんを助ける。立てハルカ！ 非常階段で裏に回って逃げろ。お前が外に出たら私が家の鍵を閉める。失敗したら舌でも噛んでここに帰ってこい。いいか、急げ、お前

がボタンを繋げ！　ほらここの交通守りでも持てば安心？　掴んで。行け！」

私は無理やり彼女の体を起こし、財布を握らせて外へと追い出すと、部屋の鍵を閉め、

「……さようなら。死なないでね、ワタシ」

と扉の前で呟いてから部屋の定位置に戻った。部屋はやっぱ汚かった。増えたか何だか知らないけれど、ハルカは遥香である。精神的に疲れているかもしれないけれど、姉ちゃんを助けたくないという気持ちは微塵もないはずである。他に悩み事があるわけでもない。彼女もきつと、動き出したらやるだろう。特にあのハルカは極端に面倒くさがり屋さんだった。そんな人ほど利那主義だし、それを原動力に最低限のエネルギーで生産性を最大限まで高められるのであれば誰よりも戦力になるであろう。彼女の代わりに私は、もつとのんびりとこの人生を過ごしたかった。彼女が家を出て行って数分、この数分を使って私も荷物を纏めて『誰だか分からない敵』から逃げることもできた。けれど、私が今逃げ出すと捜索体制が強化されてしまうのではないだろうか、そんな予感がした。私はいつでも逃げれる。死に癖もついている。覚悟というほどの覚悟ではなかったが、私は時が来るまで定位置で目を閉じることにした。いろんな物音が聞こえてくる。サイレンの音がピタッと止んだ。そろそろ誰かがうちに踏み込んで来るだろう。

「上手くやってね」

部屋のインターホンが私の体のあちこちに充滿していくように響いた。

「誰かが……来る」



五の記憶

一の遥香

大学病院に閉じ込められ、分裂に期待して自決した。今はびんびんしているが、分裂したかどうかは知らない。



飛び降り自殺で誕生。

二の遥香

青海豚の藤沢智弘に襲われ、消息不明。



脱水症で誕生。

四の遥香

一の遥香同様、大学病院に閉じ込められている。



自決で誕生。

六の遥香

キッチンの床で寝ていると、高校時代の制服を着たワタシに起こされた。

長い長い夢のような記憶と、自身の服装から状況を把握するも、何もかもが面倒で全くやる気が起きない。



五の遥香

ホテルで目を覚ますと、高校の時の制服姿だった。なんで?!

一先ず自宅に帰り一息ついていると、キッチンに人影が。

何でも知っていそうな口を利く彼女だが、面倒くさがって教えない素振りにイライラ。



姉の冬華

幼いころから西京学院大学病院に入院している姉。

對馬教授の人質にならないように遥香が救いに行く。



第八話 六の叫喚

私はキッチン前の床で目覚めた。長い長い夢を見ていたようで動く気力が湧かなかった。誰かに呼ばれている気がする。

「なんだお前、なんでこんなところで寝てんだよ。おい、起きろって」

私は身体をひっくり返された。

「おい、何してんだよ」

そこには私と同じ顔が合つて、ふと自分の服に目をやると西京学院大学医学部なんちゃら研究室の水色のユニフォームを着ていた。

「ああ、そういうことか」

それにしても煩くてうざったいやつだった。構ってるだけで自分の体力を取られてしまいそうである。そこかなんやかんやあつて今、西京学院大学病院に個人タクシーで向かっている。細かい経緯や詳しい説明はあまりにも面倒なので割愛しよう。とにかく、私は誰にも捕まってはいけないのだ。

「私は脱獄犯かよ。あ、いや、脱獄犯かもしれん」

自殺を決意する直前はもう考えることも尽きていたが、今を含め独りになるとなぜか考え事をしてしまう。

「もつと自分を大切にすればよかったや」

私は無計画のまま病院に向かい、念のため三ブロック手前の通りで降ろしてもらうことにした。姉ちゃんが居るのは入院棟だから、確か正面向かって中央診療棟の奥。その更に奥に特別研究棟が二つあるから、上手くいけば奴らに出くわさずに行ける。ナトリノちゃんの迂闊で丁寧な施設紹介のお陰でドジは踏まなそうである。しかし私はバカだった。頭が回らないまま家を追い出されてしまったせいで服を着替えてくるのを忘れていたのだ。私は盛大に後悔した。西学病院に入るのに西学のユニフォームを着ているのはあまりにも目立ちすぎる。せめてコートの一つ手に取ってくればよかった。タクシーとはいえ、また家に帰るのはやや面倒すぎる。

「あのお、すみません、運転手さん」

「はいはい？ どうしました？」

「そのコート、おいくらぐらいしたんですか」

タクシーの助手席に見えた黒いコートをあわよくば譲ってもらっちゃうぞ大作戦を決行したのだ。

「これですか？ これは七十万かな」

「七十万？」

「シネルの会員限定ビンテージ品だからね」

不運すぎた。なんでもりによって高級品なんだよと心の中でブランド品を恨んでいた。それにしてもシネルだなんて縁起でもない名前である。

「どうかしました？」

「いえ、何も。お似合いですね」

「お嬢ちゃん、お目が高いねえ。この前の五十の誕生日に自分宛のプレゼントとして買ったんだ。いやあ正直高いかなあと思ったけどね、ま記念よね。お嬢ちゃんも長く生きて長く働き続ければ買えるようになるよ」

「そうですね。頑張ります」

七十万と聞いてこれ以上話を続ける価値が無くなってしまい、私は適当な相槌をうった。とにかく、奴らに見つからないように潜入しなければならぬ。そうこうしているうちに病院の手前までついてしまつて、私は西学のユニフォームのままタクシーを降りることになった。もし分裂したことがバレていたらどうしよう、姉ちゃんんの病室で待ち伏せされてたらどうしよう、そう思うと足がすくんで思うように動かない。

「でも選択の余地は無いよね、これ以上私の周りの人が死んでたまるもんか」

私は特に曲がり角を警戒しながら走つて病院まで向かったが、驚くぐらいに誰とも会わない。だんだんと息が切れてきて、こんなことなら病院の目の前で降ろしてもらえばよかったとも思った。

「走るの意いな」

敷地内への潜り込みが成功して、そのまま入院棟に向かった。姉ちゃんの病室は確か三階の個室。しれっと入院棟に足を踏み入れると受付で薄ピンクの服を来た看護師の男性と目が合った。男性はごわごわと髭を生やしていて緑のネームプレートと院内番号端末を下げていたのだが、それと同時に何か変な違和感を感じ取った。何が変わるのがピンとこないのだが、何かがおかしいのだ。しかしそんなことに構っている暇もなく、私は姉ちゃんの病室に向かった。

「三〇一鵜澤、三〇二斎城、三〇三清水、三〇四大石、三〇五和田、三〇六三井」

急いでいる時に限って姉ちゃんの病室は見つからない。誰のか分からない足音すらも恐怖のリズムに聞こえる。

「三〇七尾島、三〇八田口、三〇九安藤、三一〇高橋、三一一……読めない、三一二山崎、三二三榊田、三一四沖野、三一五武田、三一六岩井、この病院大きすぎだろ、ん、三一六、五、四、三、三二三榊田、ここだ！
姉ちゃん！」

誰かが中で待ち伏せているなどということを考えもせず、勢いよく扉を開けた。真冬だというのに室内の窓は全開になっていて、白いカーテンだけが揺れている。姉ちゃんの姿は見当たらずに私は少し警戒した。

「姉、ちゃん？　いないの？　せつかく来たのに、先を越されたか……」

私はため息しか出なかった。もっと早くに家を出ていたら、もっと真剣に駆けつけていたら間に合ったのではないかという後悔が大きかった。机にはフルーツナイフとリングが転がっていて、冷え切ったリングは置物のように表情を失っている。それを見ていると途端に全てを諦めたくなって、姉ちゃんのベッドの上に腰を掛けた。

「姉ちゃんはずっとここで寝てたのか。なんだか、もう、人生疲れたなあ」

そう思つて目を閉じていると微かに、姉ちゃんの声がした。

「遥香？」

「姉ちゃん？」

廊下からだった。

「遥香？　何してるのこんなところで」

姉ちゃんはさっと病室の扉を閉めて中へ入ってきた。

「いや、なんていうか姉ちゃんの顔が見たくなつて」

「そっか」

「どこ行つてたの？」

「トイレよ。また体調が悪くなつてさ」

姉ちゃんは少しフラフラとしていて、着ていた毛糸の私服は汗で色がやや濃くなっている。

「ねえ、話があるんだけど」

「うん？」

「ちよつと唐突な話かもしれないけど、いい？」

「うん」

「姉ちゃん、逃げよう？　ここから」

何の事情も知らないうえに論理的な姉ちゃんだから、二つ返事では引き受けてくれないと思つていたのだが、

「分かったわ」

と、あっさり応じてくれ、それ以上特に何も聞いてこなかった。それがむしろ不自然で、提案した側にもかかわらず気になつて聞き返してしまった。

「なんで？　誰から逃げるかも、なんで逃げるかもまだ何も説明してないよ？」

「だいたい分かるよ。病院から逃げるんでしょう？」

「それはそうだけど、でもなんで」

「遥香が着ている服よ」

「えっ？」

「西学病院のユニフォームってデザインは同じだけど棟によって色が違うの。中央診療棟は薄黄色、入院棟は薄いピンク、外来診療は確か……」

私がここに来たときに入り口で感じた違和感はこれだった。髭のおじさん看護師が着ていた服はピンク色だったのだ。確かに幼い時に外来診療棟で診てもらった時、先生は薄緑色の服を着ていた。

「そして遥香が今着ている服は水色。水色が具体的にどの棟のものかは覚えてないけど、この病院にある棟は残り五つ。管理研究棟、病態研究棟、臨床研究棟、臨床試験棟、特別研究棟。どれも実験施設でしょ。詳しいことは知らないけど、遥香は何か危機を感じて助けに来てくれた。そうでしょ？ 遥香についていくわ」

「ありがとう。でも、なんで」

「こう見えてもお姉ちゃんだからね。遥香のことは遥香の次によく知ってるつもりよ」

「ありがとう。でも姉ちゃん、あとで謝らないといけないこともあるんだけど」

「そんなの後でいいわ。それよりここに来る時に病院関係者に見られてないの？」

姉ちゃんの余裕のなさそうな顔を見て私は怠ける暇もなく答えた。

「うーん、受付で男性の人と目があつたくらい？」

「ならば急いだほうがいいわ。病院内のネットワークを甘く見ない方がいいかも。誰かに見つかったら情報は全部筒抜けだと思って」

「了解」

私は病室の机に置いてあつたフルーツナイフを手にとって、この場を立ち去る準備を済ませた。それを見た姉ちゃんは一言私の耳元で囁いた。

「遥香、あなた誰かを刺したりなんかしないよね」

何だか自分の腹の内を読まれているような気がして、私は姉ちゃんから一步遠ざかった。

「しないよ、そんなこと」

「そう。ならいいけど、どこに逃げる？」

「駐車場。バイクが停まつてる駐車場ならどこでもいいから、案内して」

「なら非常階段が使えるわ。こっち」

切り替えの早い姉ちゃんは私より早く病室を出て、その案内のままに私も階段を駆け下りた。入院棟の地下駐

車場はコンクリートが冷え固まった臭いがして、その空気を私たち二人で独占した。

「ここからどうするの？」

「大きめのバイクで、イモビラが点滅してないやつを探して」

「イモビラって？」

「イモビライザー！ 赤い点滅！」

「分かった」

私は任天堂の脳トレのスピード感でハンドルロックのかかかってないバイクを見つけては、手当たり次第にフルツナイフの先端を鍵の穴に挿し込んでエンジンをかけようとした。しかしなかなか思ったようにうまくはいかず、バイクの破壊が続く。

「だめっ、次」

それから六台目くらい的大型二輪車を無駄にして私は焦り始めた。

「私がやるわ」

震える私の手を姉ちゃんが包み込んでくれた。

「ありがとう」

姉ちゃんは黒く艶のあるタンクに手について、一気にナイフを挿し込んだ。その手つきは完璧だったようで、バイクはエンジンがかかりブルンと唸った。

「よっしゃっ」

浅黒いグリップエンドに、やや傷のいったラジエターファン、黒い鏡のようなそのバイクは、メーターとマフラードイススクローターだけが銀色に輝いている。しかしハンドルには同色のハンドルロックもかけられてあって、私はそれをシートに跨ってから気づいた。

「あ、姉ちゃん、だめだこれ、ハンドルロックが」

「そんなの壊せばいいんでしょ」

姉ちゃんが後ろの席から持っていたフルーツナイフでハンドルロックを一突きすると、壊れたハンドルロックがガチャンと痛々しい音を立てて地面に落ちた。

「さ、さすが。ありがとう。じゃあ行くよ、飛ばすから捕まってるね」

「うん」

バイクの免許は持っていないけれど、二段階右折は理解していると自分に言い聞かせて、そのままバイクを足でこころろと転がした。

「あ、ねえ、ナイフ貰うよ」

姉ちゃんの顔は見ていないけれど、彼女の表情が少し変わったのは声のトーンと気配で分かった。

「えっ」

姉ちゃんは私の背中に抱き着いて、再び耳元で囁いた。

「遥香、あなた自分を刺したりなんかしないよね」

「そんなこと、するわけないじゃん」

その答えを聞くや否や姉ちゃんはナイフを駐車場の隅っこに放り投げて一言冷たい声でとどめを刺した。

「なら、いらないでしょ？」

私はそれを拾うこともできず、振り向かないまま地下駐車場から坂道を上り、一気に入院棟の敷地から飛び出した。私は自殺という切り札を取り上げられてしまって、逃げ切ることを考えられなくなってしまった。姉ちゃんはまるで何でもかんでも知っている様だった。地下駐車場を出て中央診療棟を通り過ぎ、正面のエントランスを抜けると私は高速道路に向かってどんどん加速させた。

「姉ちゃん、地図で高速の入口の場所調べて」

「了解」

まだ誰も追ってはこない。姉ちゃんの案内に従ってそのまま高速に乗ると私は海を目指した。まだ大丈夫、まだ大丈夫、自分にそう言い聞かせては病院との距離が着実に開いくことを実感して安心している。

「ねえ、遥香、スピード上げれる？」

「どうして？」

姉ちゃんが唐突にそう言ってきた。

「上、上見て」

「上？」

運転しながらちっと上を見ると、一機のヘリコプターが目についた。機体は白、プロペラは青。運転しているせいであまり長く目を離すことができなかったが、私はその正体を確実に掴んだ。

「まさか、ドクヘリ？」

「うん」

いつからつけられていたのかは分からない。けれど思い返せば随分と前からプロペラの騒音は聞こえていたような気がした。

「かなりまずいね」

「どうする」

「西池袋から乗ったはず。だからたしか、ここが中央環状線ならこの先に長いトンネルがあつたはず」

「トンネルならヘリは入って来れないってことね」

「そゆこと」

「あ、山手トンネルだって」

「ビンゴだね。急ぐよ、捕まッて！」

トンネルの中に入ると流石にドクターヘリも追ってこれなくなったようで、ほんの一瞬だけ安心する時間を与えられた。

「でもどうすんの。出口だって限られてるんだからこのまま走っても袋の中の鼠ちゃんだよ」

「路肩を使うしかないね」

「路肩？ すっ飛ばすの？ 違反だよ」

姉ちゃんは大声で後ろから声をかけてきた。

「いいや、その逆。停止する。どちみち違法だけど」

「え？」

「七百か八百メートルくらいの間隔で非常駐車帯があつたはずなんだ」

「停まっただうするつもり？」

「他の車両をジャックする」

「バカ？　ここ高速だよ？　正気？」

姉ちゃんに怒られるのはすごく新鮮な感覚だった。

「うん。あ、ほら長いのが来た。あ、行っちゃった」

「もうちよつと説明して」

非常駐車帯にバイクを止めると、横をびゅんびゅんと車が通りすぎる中、私は姉ちゃんにこれからの作戦を伝えた。

「いい、バイクで逃げてもすぐにばれる。ならバイクじゃなければいい。他の車に飛び移るの。狙うは平ボデ
イよ」

「正気？」

「正気。やるよ」

しかしさつき大型のトラックが行ってしまつて以来、平ボデイのトラックはなかなか現れなかった。私の熱意

に腹をくくった姉ちゃんだったが、あまりにもお目当てのトラックが現れず、だんだんおふざけをかますようになつてきた。

「あれは？」

「あれは重機輸送車。アオリがないからちよつと危ない」

「あれは？」

「あれはダンプカー。土が載つてる」

「あれは？」

「あれはトラクターヘッド」

「あれは？」

「日産の軽。論外。あれのどこに乗んのよ。てか姉ちゃん、ふざけてる？」

「バレた？」

その次の瞬間大きく長いトラックが横を通った。

「あれは？」

「それだつ。あれはクオンか？ いや違うな。超低床型平ボディだけど、速い。改造車か？ 行けるな。姉ち

やん捕まッて」

私はバイクのスピードを百二十キロまで一気にあげてトラックの真横につけた。

「姉ちゃん、横から飛び乗ッて！」

「で、でも」

「いける。ふちをもッて中に入るまで絶対に手を離さなければ問題ないから」

姉ちゃんは問題大ありだよと言いながら指示通りトラックに飛び乗ッた。

「おおけえい」

次は私の番である。後ろの車が異常を察知して速度を落としているのがミラー越しに良く分かる。

「昔習ッたっけか、下手したら死ぬからマネするなッて言われたなあ。岡本小路先生、ありがと。理科の授業がこんなところで役に立つとは思ッてもなかつたよ」

私はハザードランプを点灯させたまま速度を徐々に落としてトラックの後ろにつき、大きく息を吸ッて、バイクの絞り弁を全開にした。

「私は死んでも死なないだけだね。フルスロットルッ」

たった数秒のことである。トラックギリギリのところの前輪だけにブレーキをかけて、慣性の法則に身を任せ

るようにしてトラックの荷台に飛び乗った。乗り捨てたバイクはそのまま転がって路肩に突っ込んでいき作戦は成功した。

「よっしゃ、問題なしっ」

「由々しき事態だよっ」

お笑い芸人の突っ込みのようなテンションで声をかけた姉ちゃんだったか、どうやら私が着地するタイミングで彼女の右足を踏んでしまったようで、強がってはいたが相当痛そうにしていた。

「ごめん」

「なんとかなるよ、気にしないで」

「ごめん。ありがとう」

「それより遥香今のあれ、危なすぎでしょ。もっと自分を大切にしてよね」

「死なないから大丈夫っ」

こんな景色はハリウッド映画でしか見たことがなかった。流石に百キロ越えの風を生身で受けるのは怖すぎる。もちろんドライバーは私たちの存在に気づいていて、説明責任を果たすまで私は休む暇がなかった。私はポケットから何かを落とした気がしたが、気にせずドライバーの近くまで行って大声を上げた。

「運ちゃん！ ごめんなさい。あ、前向いて走ってくださいね。実はバイクが壊れちゃって。お願いします、次のサービスイリアまで連れてってください。そこで降りてもらえればそれでいいので」

運ちゃんも高速道路の上では降ろすに降ろせず、話すに話せず、停めるに停められなかったためそのまま道を走り続けた。トラックの荷台には角材やら鉄パイプやら土嚢やらが盛り沢山に積んであったが、私たち二人が横になって寝ていられるスペースも余裕であるくらいに広々としていた。

「ねえ、この後は？」

「とりあえず車を乗り継ぐよ」

横になっている姉ちゃんに尋ねられ私は迷わず即答した。

「サービスイリアの？」

「うん」

「でも車はバイクみたいにエンジンいれられないよね」

「だからサービスイリアに行くんだよ」

進行方向とは逆を向いて話していると、通り過ぎたばかりの合流車線から白と赤の車が猛烈なスピードで走ってくるのが見えた。救急車だ。

「やつらか」

「どこ？」

「合流のどこ」

「これは、どっちだ。事故か？ 私たちか？」

ドクターヘリはまだいない。

「私たちのこれも十分事故みたいなもんでしょ。どっちにせよ近づかれるのは危険よね」
「そうだね」

私は運転席に限りなく近いところで声を上げた。

「運ちゃん！ 右！ 右いー！ 第三通行帯を走り続けて！」

運ちゃんは窓を開けてくれて話に応じてくれた。

「お願い、~~左~~からの一生のお願い。追い越しに行って百六十キロで飛ばして」

「あんたらバカか？ 俺はともかくお嬢ちゃんは死ぬぞ」

「私は死ねないから、大丈夫。登坂なんかでノロノロ走るなー！」

「どうなってもしらんぞ」

トラックはウインカーを出して一番右の車線に移動してくれた。

「兄ちゃんやるじゃん」

私は荷台に戻ると姉ちゃんに軽く一喝された。

「あんたのどこがJKよ」

「へへ、ちよつと鯖読んでみました」

「まあ、なんと鮮度の落ちた鯖でしょう。この「D」四年目め」

「残念でした。中途退学してますう」

姉ちゃんとのくだらない漫才のような喧嘩はなんだか楽しかった。このまま穏やかに世界が終わればいいのに
と思っても、そうは簡単にいかないのが現実である。救急車も速度をぐんぐん上げてくる。救急車は車線変更
した私たちのトラックを見つけると赤色灯を点灯させた。ピーポーピーポーと威嚇の様なけたたましいサイレ
ンは徐々に近づいてきて、それと同時に走りながら全後続車両に対して速度を落とすように拡声器で促してい
る。私は人生で初めて渋滞の始まりを見た。

「へえ、こうやって渋滞が起きるんだ」

「何呑気なこと言ってるのよ。しかしあの救急車、何キロだしてんだよ」

「救急車の人たちもおんなじこと考えてるかもね」

やはり大きく重たいトラックは救急車のスピードに勝てず、すぐに追いつかれてしまったのだが、救急車は私たちの乗るトラックを大幅に通り越して走っていった。

「あれ、救急の運ちゃんはドライブへたび？」

そんなアホみたいなことを抜かしていると、救急車は第二通行帯で一気にユーターンし、そのまま百キロ越えを維持しながらバックで走り続けた。

「素面か？」

私たちのトラックと横並びになると救急車の扉が開いて、中からは由依が顔を出した。

「由、依」

「由依ちゃん？」

「やっぱり、冬華さんも一緒だったんですね」

「由依、どうして」

「ごめん、本当は乱暴なことをするつもりはなかったんだけど」

「そんなつもりがなかったんなら追いかけてこなければいいじゃない。それでもまだ私を解剖したいから執拗

に追いかけてきてるんでしょ」

「違うわ。あなたは危険なの。他の誰かに捕まりでもしたら世界が危機に脅かされるって言ったよね。車を停めて、話を聞いてよ」

「だからといって病院に閉じ込めたのも事実だ」

「あれは對馬教授がそうしろって」

救急車の運転席には名取さんの姿が見えた。

「なら教授が自分でここまでくればいい。私の自由を奪わないでよ」

名取さんが救急車を車幅数十センチぎりぎりまでトラックに近づけると、由依が走るトラックの荷台上上ってきて話を続けた。

「あれは院内に青海豚団らしき人がやってきたからよ」

「そんなの関係ないよ。じゃあなんで事情を説明してくれなかったの。なんで何も教えてくれなかったの。私はもう決めたの。誰もいないところで過ごすって、ただそれだけだよ。だから邪魔はしないで」

荷台の積載物の中から私は角材を拾い上げて大きく振りかぶった。

「死んでも死ねないでしょっ。私の勝ちだよ」

由依も足元の積載物を咄嗟に手にし、私の襲撃を鉄パイプ一つで受け止めた。

「さすが、速いね、チャンピオンは」

由依は武術太極拳槍術の基本功、攔槍・拿槍を応用した手つきで私の角材を軽く振り払った。私がよろめいて
いる隙に彼女も木の棒に持ち替えて、手の甲でくるくるとそれを回し始めた。

「何が狙い？ 殺す気？」

「死ねないでしょ？」

由依は一切手を抜くことなく攻めてきて、仕方なく私も打ち返しの要領でそれに応えた。

「百八十センチすらないただの木じゃ、白蠟棍はくろうこんか何かほど上手く扱えないでしょ」

「丁度薙刀の長さかな。遥香の方が有利ね」

「殺したくはないから辞めてよ」

木屑しか飛ばない争いだが、勢いだけを見れば戦国時代の合戦を優に超えている。私は地味に地味にトラック
の荷台の端っこまで追いやりながらも相手との距離を一定に保ち、彼女の振り回す棒を右に左に払いながら話
しを続けた。両者無駄のない動きを切り取って見ると、それは屏風の中の風神と雷神の様だった。

「遥香は死ねもしないその体でなぜ生きようとするの。一時は死にたいとまで考えていたのにね」

「挑発？ 由依らしくない。人が何かを作ろうとしたときはね、完成させて初めて意味を成すの。由依たちの研究もそうでしょう？ 生死をワンセットだと考えれば、生の完成形は死、つまり死ぬことなんだよね。だから私は死に方を見つけるために、生きるの」

「遥香も遥香らしくないわね。偽物だから？」

「角材を握って武士の在り方を思い出したからよ。時に武士道とは己の死に方を見つけることであるってね、私の師範がそう言ってたことを思い出したのよ」

「そんな綺麗ごとで片付けないでよ」

由依の棒捌きはより速さを増した。

「由依の武術太極拳は美しさや撓^{しな}やかさで競う競技だったっけ」

「なに、弱いとでも言いたいわけ？」

彼女の棒に一瞬さらに強い力がこもった。

「いや、ただ、」

私は持っていた角材を彼女の目の前まで突き出して、視界を一瞬奪い、その後、一気に懷まで距離を詰めた。

「私はそんなに美しく生きるつもりはないわ」

そういつて私は持っていた角材を捨てると、右足で彼女の腹部を蹴り上げた。カウンター攻撃は上手くヒットしたみたいで、由依は高速道路上で宙を舞った。一瞬だけ、ほんの一瞬だけ私の中の時間がゆっくりになった。しかしそれよりも早くに横を走っていた救急車が速度を落としてトラックの後ろにバックのままくっついていたようで、内側から開いた扉の中に由依は吸い込まれるように落ちていった。扉を閉めたのは名取さんだった。

「高速百キロのリバースをオートクルーズでつて、なんて度胸と技術だ」

救急車の動きは止まったようで、私たちはトラックに積んであった土嚢を数個落としてから前を向いた。

「由依ちゃん、なんとか命は助かったね。さすがに殺すつもりはなかったでしょ？」

「名取さんのドライブテクニクに賭けただけさ」

「名取さん？」

「あの救急車のドライバーよ」

救急車は追いかけてこなくなつて、一旦は落ち着きを取り戻すことに成功した。

「しかしこのトラックも運ちゃんもよく頑張ったな」

「えらい上から目線ね」

「たしかに。しかしまあ運ちゃん一人で良かったね」

「うん、二人いたら間違いなく通報されてたよ。ま、他の車両の人が通報してるかもね」

「最近はずっとどの車に車載カメラが設置されるようになったから嫌になっちゃうわ」

「動かぬ証拠ね」

「動く、動かぬ証拠だね」

サービスエリアまで残り五キロ、余裕があるわけではなかったが、なんとか計画は順調そうだった。



六の叫喚



一の遙香

彼女の自殺が全ての始まりだった。



二の遙香

一の遙香の自殺が原因で誕生。



三の遙香

一が二を刺した時に誕生。二は彼女の存在を秘密にした。



五の遙香

三の遙香が元彼に刺殺された時に誕生。



四の遙香

一の遙香が脱水症状を起こし、死をもって誕生。



六の遙香

大学病院に閉じ込められ一の遙香が自決。誕生。



姉の冬華

遙香に連れられて病院を抜け出すのだが……。

第九話 私の一步

トラックはサービスエリアに到着した。もちろん名物ちゃんぽんを食べる暇もたこ焼き自販機に寄る暇もなく、私は走らされた。さつき負傷した右足がやや痛むが、そんなことを考えていられなかったのだ。トラックの運ちゃんに一言、ありがとう、ごめんねって声をかけたものの、彼は相当恐怖に包まれていて、何よりも事故にあわなくて良かったと安心していることだろう。土囊を含むいくつかの積載物を私たちがダメにしたせいで、きつとどつかのお偉いさんに電話をするはめになるのだろうか、今かけている電話は恐らく警察に繋がっていると思う。どんどん小さくなっていく運ちゃんに罪の意識を感じながらも、私は遥香の指示通りに走った。できることなら彼の人生も、由依ちゃんの人生も名取さんの人生も、すべて平和なものにしてあげたかった。

「遥香、もしかしてガソリンスタンド狙ってる？」

「正しい解。これも生きるためよ。私はもう面倒ごとは嫌なの。最低限の努力と最小限の犠牲でこの街を出るわ」

「そうするしか、ないのね」

「うん。あ、来た、あの白のクラウン、サラリーマンが一人だけみたい。狙うよ」

明らかに悪いことをしていることは分かっていた。けれど、私はどんな立場で遥香に接すればいいのか分からなかった。クラウンが順番待ちの列に停まっているのを見て、遥香はゆっくりとガソリンスタンドに歩いて行った。

「右ハンドル、左給油口。完璧ね。姉ちゃんは加速車線の近くに行つて。そこで拾うから」

私は彼女を止めることができなかった。彼女はきつと私のために動いてくれるのだろうから。言われた通りに動くしかなく、ガソリンスタンドの出口の先に立った。遥香が来るまでに数台の車が通りすぎ、その度にまじまじと見られるのがちよつと恥ずかしい。順番待ちをしていた白のクラウンがついにキャノピーの下に停まり、紺色のスーツを着たサラリーマンが降りてきた。給油中、彼は適当に視線を車から外し、ストレッチをしながらガソリンを入れていた。遥香はどのタイミングでジャックする気なんだろう。そう思つて眺めていると、給油中の車にいきなり乗り込んで車を動かし始めた。私はさっきトラックの上で拾ったピンクのお守りをぎゅつと握りしめてポケットにしまい込んだ。異変に気付いた男はガソリンの手を止めて左手で助手席の扉を開けるも、遥香は無理やり車を奪い取つて、五秒後には私の目の前にむき出しの助手席が現れた。

「はやく！」

「いめんなさい」

私はそう言って車に乗り込むと、後ろを振り返ることはできず、車を盗むことに成功した。ごめんなさい、そう思い続けながら目を閉じた。

「キーレスエントリーで助かったあ。さすがクラウンだね。財布も携帯もここに置いてあるし、通報にも時間はかかるだろうから暫くは大丈夫でしょう」

「……そうだね」

私と遥香の間に数分の沈黙が流れた。沈黙といってもワンセグ放送で『ジューちゃんに叱られる!』という番組が流れていて、暫く無心の状態で耳を傾けていた。

『ねえねえヒロユキ、なんでえ家族の中でお兄ちゃん、お姉ちゃんとは呼ぶのに、弟ちゃん、妹ちゃんとは呼ばない』

遥香がテレビの音量を落として私に話しかけてきた。

「それで姉ちゃんさ、何で知ってるの？」

「急に何？」

「誤魔化さないでよ。知ってるんでしょ、分裂のこと」

遥香はやけに冷たい目をして遠くを眺めていた。きっといろいろなことを考えているのだろうが、その表情は

無心の表情に似ていた。

「何でそう思うの？」

「姉ちゃんがそのことに何も触れてこなかったからよ。病院を抜け出そうって言ったときも、由依とトラックの上で話したときも不自然な会話はあつたはず」

「それだけ？」

「姉ちゃんは私に、自殺なんかしないよねって聞いたよね。分裂条件を知つての発言だったんじゃないの？話して。知つてることを話して。場合によっては今からでも病院に閉じ込められた二人だって救えるかもしれない」

私は悩んだ。話してしまうと、今まで黙っていたことが無駄になつてしまうような、そんな気持ちになつた。けれど、真実を知ることと彼女が楽になるのなら、重たい口を開いた。

「澤田昭造。この前他界した爺ちゃんは、分裂人間だった」

遥香は口を半開きにしたまま驚き固まっていた。

「私の入院生活、その面倒を見てくれたのはおじいちゃんだね、その時にこつそりと、私だけに教えてくれたんだ。もちろん最初は信じなかった。私を元気づけるために古臭い笑いでも取ろうとしているんだって思

つてた。でもある日一度だけ、見せてくれたんだ。おじいちゃんが二人いるところを。下手なホラー映画より怖かったよ。けど、信じるしかなくて、そこで私は病室でおじいちゃんからいろんな話を聞いたわ。おじいちゃん二人いて大変だった話、おじいちゃんが二人いて嬉しかった話。いろいろあったわ。おむつは二倍買わないといけないのに年金は二倍にならないだとか、たまに酒を交わしては同じ思い出話を延々と話してられるから楽しいだとか。なんだかんだ幸せそうだった。そんなおじいちゃんは遥香も知ってる通り六十五歳でこの世を去ったよ。自然死。この世で一番平和な去り方だった。だからまあ、遥香も二百歳になっても三百歳になっても死ねないってことはないだろうね」

「そうかもしれないね。それで？」

「それくらいよ」

「お父さんとお母さんは？」

「お父さんは」

「お父さんは？」

「死んだ」

「それは知ってる。なんでだって、聞いているの」

この子にはもう何も隠し通せないかもしれない。

「分裂人間の疑いがかけられたんだ。当時医学部の教授だった二宮って男に」

「疑われただけじゃ死なないでしょ」

遥香が狭い車の中で大声を上げた。

「殺されたんだ、二宮に。分裂人間は死なないと判明しない。けど父は分裂人間じゃなかった。だから死んだんだ。だから殺されたんだ。私を含む遺族には通り魔による不運な無差別殺人事件って伝えられてたけど、真相はだいぶ異なるみたい」

遥香は怪訝な表情のまま手元と口意外動かさなかった。

「お母さんは？」

「お母さんは、知らない」

「ねえ、今自分で話していて、話しくくなかった？ 姉ちゃんは今もつと論理的に物事を考えられる人でしょ？ 姉ちゃん今、明らかに一ピース抜かしてる。まだ隠してる。そうでしょう？」

私にとってはキツイ一言だった。一番隠しなかったところを穿り出されるこの感覚はとても不快だった。それでもしらを切ってみようと思った私を許してほしい。

「ピース？ 何のことかしら」

「おじいちゃんのこと、姉ちゃんしか知らなかったんでしょ？ チクったの？ そうじゃなきゃお父さんもお母さんも疑われなかったよね？ なんてお父さんは疑われたの？ 姉ちゃんのせい？」

下手な誤解を生むくらいならと、私は観念した。

「いいや違う。私が分裂人間だった。だから疑われた。それだけよ」

この発言をしたことは、果たして正解だったのだろうか。遥香は未だに状況を理解できていないようだった。

「ちよつと待って、姉ちゃんも分裂人間ってどういうこと？」

「梶田家はどうやら分裂家族らしいの。正確には澤田家か」

「いつから。いつから知ったの？」

「知ったのは十六か十七歳くらいの時だったかな」

「知ったのはって？」

「私が分裂したのはもつと前。六歳の時。お母さんと池袋の街を歩いていた時、赤信号を無視して交差点内に侵入してきた車がいたの。あれは確かプリウスだったわ。運悪く私はそれに跳ね飛ばされて、話によれば着地後にもう一度追突されたらしいんだ。私はそのまま病院に運ばれることになって、診察を受けたらすぐに入院

することが決定。それでもね、運が良かったって皆に言われたんだ。普通なら即死だって。小学生の私にはなかなか堪えた出来事だったわ。学校にも行きたいし、友達とも遊びたい。いつもみたいにお菓子をいっぱい食べたかったし習い事も続けたかった。そのときは新陵病院しんりょうだったかな、おとなしく寝ることしか許されなかった。もっと人間らしい生活がしたかったわ。でもそれは叶わなかった。榊田家が狂いだしたのはお母さんが一旦家に帰ったところからだったの。家に帰るとワタシがベビーベッドの中で泣いてたんだって。お母さんは信じられなくなつて発狂したそうよ。遥香は入院中のはずなのになつて。死んだのか、お化けなのか、間に合わなかったのかって。娘が増えた増えたつてパニックになつた母を最後まで信じ続けたのは父さんだった。その日の晩、父さんは手を付けられなくなつたお母さんを心配して近くの病院に片っ端から電話をかけていったの。でも、どの病院もそんな精神異常者は受け入れる余裕が無いって断られて、最終的に父さんは自分の話を何でも信じて聞いてくれる大学時代の恩師に連絡を取ったんだ」

「それが、二宮教授」

「そう。当時再生医療のゼミを持つててね、そこで父さんのことを教えてたんだって」

「その話は私もお父さんから聞いたことがあるわ」

「でもね、父さんは増えた遥香のことを一切二宮先生には言わなかったの。黙ってたの。先生はお母さんを快

く迎えてくれて、お母さんの近くに私を置いておきたいっていう理由から私も西学に移送されたわ。それから私はほぼ毎日、何度も喘息のような症状に見舞われて一向に退院できず。見かねたお母さんもどんどん精神がやられていつて家に帰ることはできなかったの」

「じゃあ私が子供の時にお父さんしかいなかったのは」

「うん。お母さんが私のところにて、父さんが遥香のところにていたからよ」

「それで、なんでお父さんは疑われたの？　なんでお父さんは殺されたの？　黙ってたんでしょ？　母さんが話したの？」

私は一息ついた。これを聞いたなら遥香は酷く落ち込むだろうなと思うたのだ。遥香は前を見ながら私の話を待っている。ここまで話してしまったら、もう隠すことはできないと思い、正直に本当のことを伝えた。

「ごめん。私の……」

「姉ちゃんの何？　姉ちゃんが漏らしたの？」

「私の喘息でバレたの」

遥香はハンドルを強く握りっぱなしで、息を飲んで続きを聞こうとしていた。

「私はそもそも交通事故で入院していたの。けれど私に現れたのは毎日の喘息症状。これがどんな検査をして

もね、どうしても結びつかなかったんだ。それを見た二宮先生はね、要因は外界にあるんじゃないかって」

「外界ってまさか」

「そう。分裂体よ。当時小学生だったかな。毎日毎日学校で限界まで走り回って、おかげで私の体力は全部持っていていかれたわ。本体とクローンは体力をシェアするの、ハルカも知ってるでしょ？ だから遥香個人の体力を使い切った分裂体は、私の体力の槽にまで侵食してきたの」

「じゃあ私が、私の本体が、いいえ、うーん、その分裂体の遥香が原因？」

「そうなるね」

「じゃあ陸上の大会で優勝したのも？」

「他人より二倍の体力源を持っていたからよ」

「そんな」

「実力じゃないわ」

それを聞いた遥香は予想通り気が滅入っているようで、厳しい現実打ちのめされていた。

「姉ちゃんは、この話は誰に聞いたの？」

「おじいちゃんよ。私が分裂体であることがバレた後、お母さんと父さんは西学病院に呼ばれたんだ。その時

に分裂体の調査に協力してほしって言われて、父さんは研究室で刺殺された」

「二宮……」

「興味が勝ったって言ってたわ。でもその後ね、自分の教え子を非道徳的な実験のために殺害したという過ちに気づいた二宮先生は、西学に特別研究棟を建てて退陣したわ」

「そんなの逃げだよ。後から気づいたんじゃないよ」

遥香は怒りのやり場に困っていた。

「二宮先生はね、同じ過ちを繰り返してはいけないって言って、最低限のデータを集めて院内に分裂人間の保護組織を作ったの」

「二宮を先生とか言わないで」

「ごめん」

「それで？ そのトップが、對馬教授？」

「そう」

「母さんは？」

「お母さんは余計に狂った。娘が事故にあったこと、父が死んだこと、自分が刺されたこと、これらが混ざっ

て、もう手を付けられない状態になったわ。精神障害のレベルは四段階の四らしい。そのまま二宮先、二宮の指示で臨床研究室に送られたはず。そして最後、二宮は私の病室まで来て起きたことを全て話してくれたわ。分裂のことはおじいちゃんから聞いていたからさほど驚かなかったけど、それでもやっぱりショックだった。冬華って名前は先生から貰った名前なの。冬に化けるように生まれたから冬化。でもなんとなく縁起が悪そうだからって、華って文字を使うようになったわ。二歳くらい上のお姉ちゃんとして生きなさいって。それから髪の毛を伸ばして、メイクを覚えて、私は遥香としての生活を諦めたわ。初めて病室に分裂体の遥香が来るときはびっくりした。陸上をやったからかちよつと肌は黒くて筋肉質で、でも顔は私。遥香は無邪気だった。本当は何もかも吐き出したかった。中学生の私にはきつかった。堪えた。でもね、何も知らずに頑張っている遥香を見ると、なんだか人生を応援してあげたくなってね、死ねなかったし生きれなかった」

「生きれなかったって、なんで」

「私は生きると、遥香が消滅するからよ。それが分裂体の消滅方法」

「なんでそんなこと知ってるの」

車の中の雰囲気はどんどん曇っていった、変わらないのは高速道路上の景色だけだった。

「おじいちゃんが教えてくれたからよ。当時六十五歳だったかな。わしはもう長くないとかって言ってきて

さ。心配になったの。それでね、私がまずは八十を目標に頑張ろって言ったら、おじいちゃんは頑張りがなくな
いって言うてきた。延命処置とかも要らん、使える臓器があれば全部誰かにやる、ボケてきたら周りに迷惑を
かけないうちに殺してくれて、そう言うてた。おじいちゃんはもう死にたいのかなって思ってたんだけど、
どうやら違うみたいでさ。目標がないと生きることを頑張れないのは今が辛いからだって、生きる意味が見つ
かったらやる気が出るような気がするって、そんな期待を抱くのは人生を諦めてるのと一緒だよ、そんなのは
見つからない方がいいって、初めておじいちゃんの口からそんな話を聞いたんだ。あの時のおじいちゃんは人
生の悟りを開いていたなあ。その日家に帰ったらおじいちゃんのクローンが消えてたって、翌日そんな話を聞
いたわ。最初は死の予兆かなって思ったけどおじいちゃんが死んだのはその二年後だし、確証はないけど、本
来死んでコピーが生まれたなら、生きてコピーは死ぬのかなって。だから私は生きれなかった」

「そんな話、全然知らなかったよ。私はね、正直もって生きたい。もって樂して生きたい。けど、私は生きち
やいけない存在なんだなって、そう思う。生きないといけないのは姉ちゃんだよ。いや、姉ちゃんが姉ちゃん
じゃなくなつて、ちゃんと遥香として生きないといけないんだよ。もう冬に化けるとか、そんな汚れた名前で
生きるの辞めてよ」

遥香の目は潤っていた。

「生きるのが怖いと思ったのは初めてよ。本当は何もかも手に入れたかった。おじいちゃんの人生も、妹として見ていた遥香の人生も、お母さんの人生も、自分の人生も。このまま何事もなく平和に終わらせたかったんだ」

遥香は喋らなかった。

「ねえ、また死ねば遥香に会える？」

その質問に遥香は苦しみながら答えを出した。

「もう会えないよ。二つを得ることはできない。妹としての遥香本体は分裂体とは知らされずに生きてアイデntyティを形成した。そして別々に生きた。今姉ちゃんが死んでも姉ちゃんがひとり増えるだけ。私には会えないよ」

分かっていた答えだった。

「私は人殺しになる？」

「ならないよ。きつと私は姉ちゃんの中に回帰するだけ。これからの人生はハルカ生きたかった人生で、」

「ハルカワタシが生きる人生」

私も遥香もその現実を理解していた。

「そうよ。病院に捉えられて希望が無くなったハルカたちのためにも、姉ちゃんが生きたかった人生を生きて」

「うん」

「姉ちゃん、話してくれてありがとう。これで私も面倒な世の中を生きなくてすむわ。ありがとう、冬華」
はるか

彼女の声は高く震えていて、私の目は涙でいっぱいになった。視界がぼやけてきて周りの景色が徐々にゆっくりになっていった。なんだか時間が止まっているようで、窓の外を走る車のスピードがどんどん速度を増していく、そんな感覚だった。私の分裂体を見ると身体は神々しく輝いていて、足元からジワジワと透明になっていった。その足の先には車のペダルが見えて私は一気に冷水をかけられたような感覚に陥った。ここは高速道路の第二通行帯。私は助手席。分裂体は足から消えていって胸部から上だけが今は残っている。車は絶賛減速中。私は感傷に浸っている間もなく動かざるを得なかった。

「まずい」

このまま放っておけばドライバーがいなくなって、確実に事故を起こしてしまう。私はシートベルトを外しては分裂体が完全に消滅した運転席に飛び乗って、ハンドルを握った。人生で初めてハンドルを持つ場所が高速道路の上だなんて、なんとついていないことだろう。

「さて、これは、どれだ」

そこには四つもペダルのようなものがある。

「これは足置きか？」

ずっと入院生活をしていた私は自動車の運転免許を持っておらず、どう運転すればいいのかを全く知らなかった。速度が少し落ちたことで後ろからはクラクションを鳴らされやや煽られている。私は右足を右のペダルに置き、左足を真ん中のペダルに置いた。ここで死ぬわけにはいかない。死んだらまた分裂して病院のベッドに逆戻りになる。私は自分の知識を総動員させて解決にあたった。車の運転において咄嗟に踏まないといけないのはブレーキ。差し当って今踏まないといけないのはアクセル。人間の機能的利き足の九十パーセント以上は右足だから、と一か八かにかけて私は痛む右足を動かし真ん中のペダルに移動させ、力一杯踏み込んだ。

私、榊田遥香の踏み込んだ一歩は死への第一歩だった。高速道路上で車のブレーキが全力で作動して後ろの車に追突された。車は助手席を潰すように横倒しになり、開きっぱなしの給油口から漏れたガソリンに散った火花が乗っかって、大きな炎が空に向かって上がった。



私の一歩



〇の遙香

六歳の冬、交通事故にあい死亡。六歳の遙香が実家に誕生。

十四歳の時、分裂人間であると聞かされる。

自分も生き、一の遙香をも助けたいと強欲に願った。

入院生活を続けるも、彼女には嫉妬の感覚が無かった。



一の遙香

身近な人が死に、自身の人生が狂った。

人生の全て。何もかもが上手くいかなくなり、他人の人生をも妬むようになった。



二の遙香

一の遙香に当時一番足りなかったものは、誰よりも自信をもって生きる力である。そんな遙香から生まれたのは傲慢な彼女だった。



三の遙香

二の遙香は自身の人生が始まってから、生理的欲求を一切満たせずして刺殺された。その反動だろうか、彼女は情欲的だった。



五の遙香

三の遙香はどんな男であろうと優しく付き合った。足りなかった怒りの感情を継いだのが五の遙香。



四の遙香

空腹、脱水の状態の遙香が死んだことで誕生した。



六の遙香

一の遙香は良くも悪くも動しみすぎた。仲間を助けようと頭を使い、東京の街を走り、研究室では資料を頭に入れ、四の遙香とも衝突を起こした。そんな遙香の最期の奮励の証が彼女の存在である。

第十話 私の選択

私、榊田遥香の踏み込んだ一歩は死への第一歩だった。給油口から漏れたガソリンに引火し、大きな炎が空に上がった。私は今どこにいる。目の前は真っ暗である。死んだのか。一瞬の衝撃が大きくて、痛みすらも感じていないのだろうか。指先は動く。熱い。熱い。死んだ感触はない。真っ暗だった視界が急に真っ白になった。

「まっ、白。エア、バッグか」

痛みを感じているということは、死ななかったのだろうか。

「はは、はははっ、私の人生、トヨタに殺されて、トヨタに助けられたなあ」

もう情けない声しか出なかった。

「大事な三択でミスったかあ。私の中に回帰した彼女たちはなんて思うかなあ。みんなあ、これが遥香初めだよ。情けないなあ」

全身が痛い。しかしこのままここに居てはいけないことを誰よりもよく分かっている。この道のずうっと後ろには多分凄腕ドライバーの救急隊員がいる。だから絶対に捕まるわけにはいかない。しかし身体は思うように動かなくて、身体が小刻みに痙攣している。もう限界だった。サイレンの音が聞こえてきて、私は早々に死に

たいと思ってしまった。ウーウーとどんどん大きくなるサイレンを耳にして私は目を閉じた。この音はどっちだろう。もう降伏だ。暫くして散光式警光灯をつけたクラシックジープが真横に停車し、運転席の扉を無理やり開けると、男たちは私を引っ張り出した。

「救急車じゃ、ない。誰？」

「こりや酷いありさまだね。駿^{しゅん}、身柄確保したよ。車両の手配に感謝する。よしゾラ、いいよ、総本まで飛ばして！」

トラックは炎上しているクラウンを置き去りにしてそのまま走り去っていった。大きなトラックの中で私は仰向けに寝かされて、顔も知らない男性に応急処置を施された。

「梶田遥香さんですね」

「誰？」

「川越正満と申します。あなたの心のパートナーです。事情は大体分かっています。本部で手当てをさせてもらった後、拘置所の独居房に入ってもらいます。道交法の急ブレーキ禁止違反、無免許運転、脅迫罪、窃盗罪、器物損壊罪、あとは、危険運転致死罪か」

川越正満、初めて聞く名前だった。

「あなたは、警察？」

「所属する省庁は違うけど、まあそんなところです。刑期が終わってほとぼりも冷めたところに、またお話をしましょう。それまで俺の顔、忘れないでくださいね」

川越はわざとらしく作った笑顔を私に向けてきた。この人を信じていいのだろうか。

「待ってください。あなたたちが、信じられる存在である、という、保証が、ない」

「信じてくれたら君を守ってさしあげますよ」

「だから、私は、あなたが信じられないと、言っているんです」

「守るのは私じゃなくて、国です。国としてあなたをお守りすると言っているつもりなんです」

彼は何ともばかばかしいことを言う男だった。

「国が？　でも日本には、証人、保護プログラムは、ないはず、です、よね」

「なくても保護すればいい」

「信じられないです」

彼は一見完璧な人に見える。ただ、私のように毎日毎日人間観察をして育った人間には、それが逆に怪しく見えるのだ。

「信じられないなんて言ったら、今あなたの身に起こっていることの方がよっぽど信じられないでしょうに。大けがをしてるあなたを、今すぐ西京学院大学病院に送って手当てしてあげてもいいんですよ。西京と私のどちらの手当てを受けたいですか？」

「それは……」

どうやら私は彼に弱みを握られてしまったようだった。

「せめてもの配慮、感じてくれましたか？」

「まだまだ、不審な点が多い、です、けどね」

喋ると身体が痛い。できることならこのまま死にたかった。増えもせず、復活もせず、誰の人生も背負わないまま、人生を終わらせたかった。

「僕はね、君には君の人生を生きてもらいたいと思う。だから、その前に君が犯した罪を全て償ってもらいたいんですよ。分かってもらえますか？」

分かるようで分からなかった。多分今までの私ならその意味をすんなりと理解していただろう。ただ、それ以上に彼に対する不安が大きすぎて、今は何も頭に入ってこないのだ。私は彼のことを知るために話を繋ぐしかなかった。

「その償いは、誰のために、するんです？」

「君のためです」

このまま死ねれば、この傷も回復されなかなと、そんな期待もしてしまう。

「死刑じゃダメなんですか」

「償う気あります？ あなたが増えちやいますよ」

彼は私の秘密をよく知っている様であった。だからこうして誘拐しているのだろうか。

「やっぱり知っているんですね」

「ええ」

ここから先は私一人で向き合わなければいけないと、そう悟った瞬間だった。

「私のことを、どう利用する気、なんですか？」

「君のような人たちを救いたいのだ。知恵と力を貸してほしい。でも今は要らない」

彼はそうきっぱりと言いつつ切った。

「なぜ。なぜ今じゃないんですか」

「そうだな。君の過去と未来を繋ぐためかな。いつか分かるよ」

私は誰のために生きるのだろうか。私のためだろうか、社会のためだろうか、それともこの川越という人のためだろうか。

「あなたは、何者ですか？」

彼は自信満々にこう口にした。

「青海豚の者です。どうぞ、末永いお付き合いでも、しましょうね」



私の選択

分裂人間の特徴

- ☞ 分裂細胞を持つ個体が 68 年の寿命を迎える前に死を迎えた場合、その 14 秒後に本体はその場で命を吹き返し、同時にその個体のクローンが生まれる。
- ☞ クローンが上記と同じ理由で死んだ場合もまた、同様の現象が起きる。
- ☞ クローンにはクローンである自覚がない。
- ☞ コピー元となる個体が最後に横になって寝た場所でクローンは生まれる。
- ☞ クローンは同時に6体までしか存在できない。
- ☞ 本体とクローン達の唯一の違いは性格。
本体含め7体はそれぞれ「傲慢」「嫉妬」「憤怒」「怠惰」「強欲」「暴食」「色欲」の因子に振り分けられる。
個体を生き延びさせるため、コピー元に一番不足していた因子に振り分けられる。
- ☞ 出現個体の累計が本体を含み七体になった時、以降いずれかの個体が死んでも復活しない。分裂もできない。
- ☞ 個体が怪我を負って死ぬ場合、その個体が息途絶えるまでその痛みを感じ続ける。
- ☞ 個体の死因となった傷は本体の復活までに可能な限り修復される。
年齢や個体数が増えるほど傷は回復しにくくなる。
- ☞ 本体とクローン達は体力を共有する。
一人が一人分の体力を消耗しきると、別個体分の体力を使うことになる。
個体ごとの基礎体力は個体数が増えても変わらない。
- ☞ 系譜上直系の個体の「死ぬ前までの記憶」は以降生み出されるコピー先に残存する。
復活及びクローン生成以降のそれぞれの感情や思考、痛みなどは共有されない。
- ☞ コピー元となる個体が「生きる事」の本質に触れ、それに対する独自の答えを導き出した時、その個体が生み出した系譜上直系のクローンは全て消滅する。本人と傍系に影響はない。
- ☞ クローンが消滅するときは 30 秒かけて足から徐々に消える。
- ☞ 分裂細胞を持つ個体は光を好まない。
- ☞ 分裂細胞を持つ個体は水質に敏感である。

生きる意味を探すための、あとがき

あとがきってどうやって書くんだっけな。最後にあとがきを書いたのは約半年前。前回書いた小説を読み返してあとがきを書く感覚を取り戻しました。

さて、榊田遥香のモデルになった人物は現実には二人いるのですが、当初はもう少しコメディ要素が強い物語にしようとしていました。一人の男を同じ遥香が取り合ったり、彼氏に不倫を疑われたり。一人がお金の無駄遣いをしたり、一人が水商売を始めようとしたり。「この調子で一体遥香は減るのかな、減る気あるのかな」と樂觀視してつけたタイトルが「ハルカ・ヘルカ」です。しかし、いざ自分が遥香になりきって世界を見た時、見えた世界はそんなに平和なものではありませんでした。顔も体も声も癖も自分と全く同じ、そんなワタシが目の前に現れたら近親憎悪が働いてきつと受け入れられないだろうなと、そう考えてから物語の軸が変わり始めました。では自分^{もう一人の自分}はなぜジブンの存在を受け入れられないのか、それは自分だけの人生を乗っ取り荒らされている感覚に陥るからではないでしょうか。他人であれば一線を引ける領域すらも、土足で入れるのがジブンです。社会との強い結びつきを維持するためのソーシャルスキルによって見えにくくなっている面もありますが、人間という動物は本来、誰もが自分だけのために人生を全うしたい生き物なのではないでしょう

か。だから自分がどれだけ生き活きとしていようが、自暴自棄になっていようが、自分の人生に入り込まれることは凄く気持ちが悪いことなのだと感じます。

今回一番書きたかったメッセージは第九話のおじいちゃんのお思想に詰め込みました。「生きる意味が見つかったらやる気が出るような気がするって、そんなの人生を諦めてるのと一緒」。本来目標は自分や組織を高めるため人生において不可欠な存在ですが、生きるための目標は寧ろない方がいいのではないかと感じはじめたのです。自分の生きる気力がなくなつて、抜け殻のようになって、希望を失つて、ボロボロになつたとしても、もう一人のジブンを受け入れられないのであれば、自分の根はまだ腐らずに生きていますから。この生きる目標のことを私たちはよく「生きる意味」といい、活力を失つた人は皆「何のために生きるの？」だとか「生きる意味を教えて」といいます。しかし、生きる意味は見つからない方が幸せなのではないでしょうか。少し理屈臭い話になりますが、もし生きる意味を見つけれたとしても、その通りに生きなければ人生に意味がなかったという結論に至ります。言い換えれば、意味のある人生を選択しなかったら生きた人生に意味がなかったということになり、全ての生き方に意味がある（＝生きることは自由である）と結論付けなければ理論は破綻します。もっとも、生きる意味が見つかれば自殺志願者を救えるのかもしれませんが。

時に、代わり映えのしない人生を惰性で生きていそうな人もいます。日課や生活のパターンが同じで、本作

で言うおじいちゃん（澤田昭造）のような存在です。第三者としての私たちはその繰り返すライフスタイルを見て退屈だと思いかもしれませんが、しかし別の一面を見るとどうでしょうか。いざ命を落とすという局面では、何かと助かりたいと思えば体が反応するはず。つまり人間にとって生きるとは生命の維持そのものにあつて、それ以外の何物でもないのかもしれません。部分的には目的を持っていて、所によつては目的がないこと理解しておく、自分との新しい向き合い方が見つかるのかもしれませんね。

ここまでの話をササッと纏めますが、結局生まれてしまった以上、人間は人生を死ぬまでの暇つぶしと捉えても良いのかもしれません。ならば、できるだけ楽しい暇つぶしにしようと、私はサイエンスフィクションの小説を執筆してみました。なかなか楽しい暇つぶしでした。でもやっぱり不安事はあつたんです。主人公がどんどん増えてしまうことで、お読みいただいている皆さんを混乱させてしまわないかなと。前回と同様に人物相関図を作ってみましたしんですけど、なんというか、名前が全部榊田遥香で書いている僕が一番混乱したんです。どうにか区別を付けられないかなと各キャラの差異を考えた結果、「性格」「表情」「服装」の三点は明確な相違点となつたので、Bモデルを作り今の形として完成しました。冬華と遥香の顔のパーツがサイズも位置も寸分違わず全て同じである点はこだわりポイントです。メイクと髪長さだけでこんなにも映り方が変わるんですね。

最後になります。が、本書の完成を楽しみに待っていた皆さん、最後までお読みいただいた皆さん、本当にありがとうございます。完成が楽しみですとかけてくださったその一言で、最後まで書ききることができました。僕の人生の暇つぶしはまだまだ終わりません。次作「青海豚の攻防編」では青海豚の川越とは何者なのか、そしてなぜ青い海豚なのか等を書いていこうかなと思っています。新型コロナウイルスによる影響で大変な状況ではございますが、ハルカ・ヘルカ2が完成するころには平穏な日々を取り戻すことができたらなと願っています。どうか気疲れが溜まらないようご自愛ください。

鳥居大誠

ハルカ・ヘルカ1

発行日 令和三年一月七日

著者 鳥居 大誠



これは未だ世の中にあまり知られていない
生物学における最新の研究の話なんですけどね
人間の身体は「ストレス現代社会」と向き合い
既にいくつかの人間は次世代へと進化を始めているんです

K. Ninomiya 「Contemporary human continues evolving」 arXiv-confidential (2020 Aug. 18)

この物語は、その進化の過程に立たされた一人の女性
柊田遥香の物語

あなたにも、その異変が訪れる前に
本書で進化の予習をさせてはいかがでしょうか